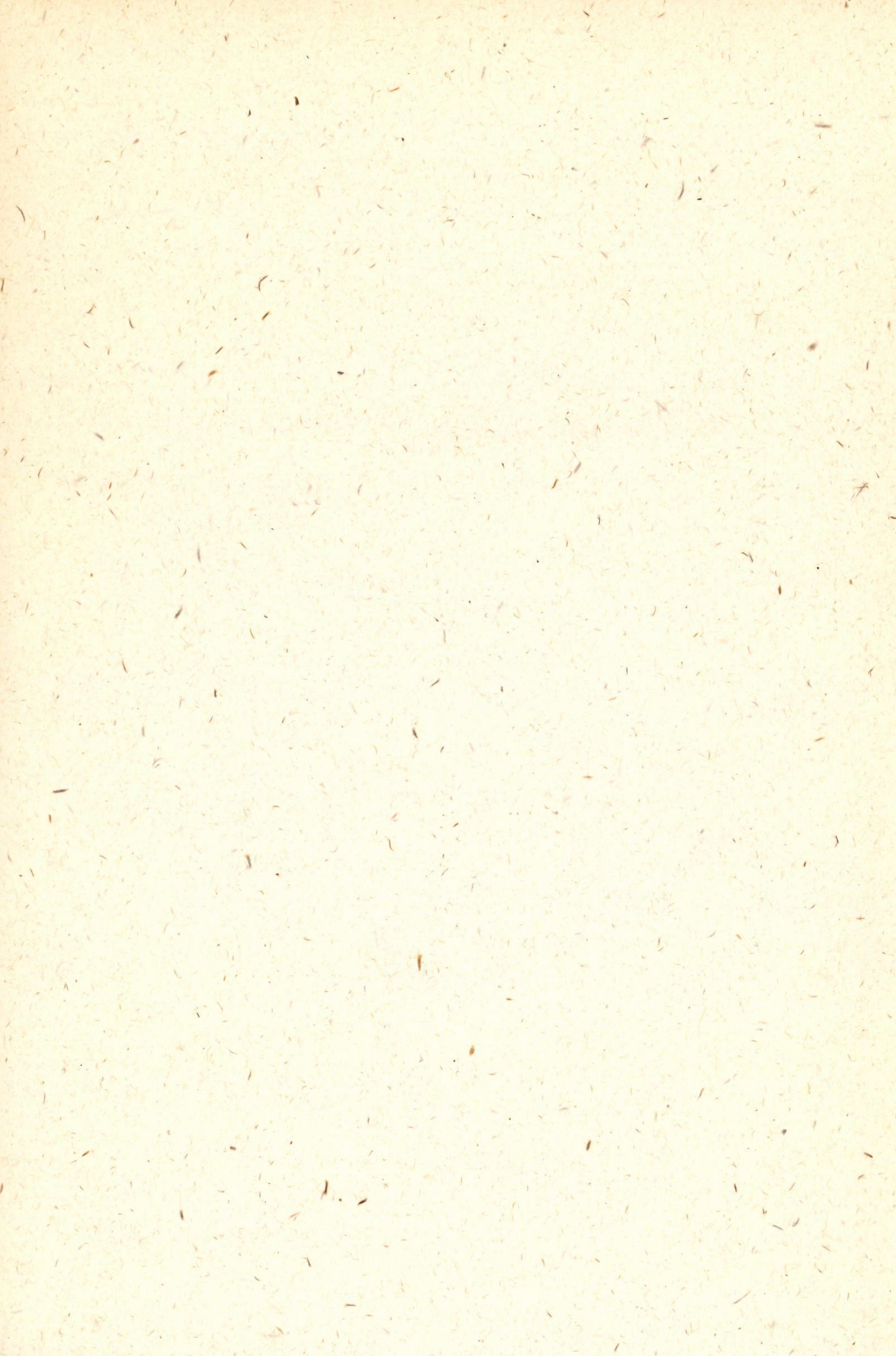


連
句

猫蓑作品集Ⅱ



序

昨年中に作られた私どもの連句作品が、「猫蓑作品集Ⅱ」として、出版されることは、私の最も欣快とするところである。

収めるところは、歌仙三十一巻、二十韻五十四巻、籟一卷と、量的にも前年度の作品集Ⅰを凌駕し、質的にも向上の跡が顕著である。

元来、現代連句は明治から大正・昭和初期までの衰亡期をうけて、漸く昭和の四十年代後半から復活し、今の活気を取りもどしたというものの、作者の多くは、それ以前の連句の伝統を受けない、いわば連句を知らない者の弟子、あるいは孫弟子が主で、自分勝手な方法で作っているまでである。それらの作品を私はすべて否定す

るわけではないが、すくなくとも、芭蕉から明治初期まで流れて来た俳諧とは異質なものと見るべきであろう。

私は昭和三十六年、先師根津芦丈翁の鉗槌を受け、その没後は遺志をついで、ひたすら蕉風俳諧の復活を願って来たわけであるが、ここにこうして、私の考えに賛同し、協力される猫蓑の方々の作品集が、前年に引続いて出版されたことは、私の最大のよろこびであるとともに、それは蕉風俳諧の弘布に大きな力になるであろう。

私はここに猫蓑の各位と一緒に、この作品集の出版を心から祝い、今後一層の発展を願う次第である。

平成四年一月十二日

東 明 雅

目次

序
歌仙

猫柳 ……………

膝送り 明雅・時彦 曹人・照敏 8

甘草も ……………

秋元 正江 捌 10

蜻蛉 ……………

市野沢 弘子 捌 12

秋澄むや ……………

内田 麻子 捌 14

新涼の ……………

梅田 利子 捌 16

梅雨寒の ……………

大窪 瑞枝 捌 18

初弁天 ……………

金久保 淑子 捌 20

初東風の ……………

加藤 道子 捌 22

木犀 ……………

加藤 治子 捌 24

初蟬の ……………

蒲原 志げ子 捌 26

風や ……………

上月 淳子 捌 28

青嵐 ……………

両吟・貞子・孝子 30

新松子 ……………

坂本 孝子 捌 32

かなかなや ……………

真田 光子 捌 34

今日の賀や …………… 式田 和子 捌 36

石路咲くや …………… 下坂 元子 捌 38

青葙の …………… 雑賀 遊子 捌 40

花の雨 …………… 下鉢 清子 捌 42

文化の日 …………… 杉内 徒司 捌 44

終戦日 …………… 副島 久美子 捌 46

啓蟄や …………… 瀧川 雅代 捌 48

沙羅 …………… 村田 富美 捌 50

石の三鬼 …………… 中島 啓世 捌 52

新涼や …………… 両吟 淳子・あかり 捌 54

棟の花 …………… 八角 澄子 捌 56

震災忌 …………… 原田 千町 捌 58

武蔵野の …………… 両吟 隆秀・千町 捌 60

行く秋や …………… 文音 隆秀・良子・道子 62

身一つや …………… 独吟 健悟 64

ころもてふ …………… 矢崎 藍 捌 66

秋の扇 山口 みづゑ 捌 68

二十韻

葱坊主 膝送り 桐雨・明雅 時彦 72

水鶏 秋元 正江 捌 74

青葉風 市野沢 弘子 捌 76

小春日や 稲葉 道子 捌 78

秋深む 岩井 啓子 捌 80

七五三祝 岩垂 景翠 捌 82

きりたんぽ 梅田 利子 捌 84

木蓮の 大谷 規美子 捌 86

鮎落つる 岡本 道子 捌 88

出水川 小野 シズ 捌 90

涅槃絵図 金久保 淑子 捌 92

雨後の月 加藤 道子 捌 94

鯽起し 加藤 治子 捌 96

春寒し 蒲原 志げ子 捌 98

梅林に 倉本 路子 捌 100

雛納め 上月 淳子 捌 102

余寒 小園 好 捌 104

葱白く 小林 千雪 捌 106

行く秋の 五味 蓉子 捌 108

大寒や 雑賀 遊 捌 110

川舟の 両吟 孝子・瑞枝 捌 112

秋霖や 両吟 孝子・瑞枝 捌 114

山笑ふ 繁原 敏女 捌 116

風光る 式田 和子 捌 118

夏越の袂 両吟 和子・貞子 捌 120

台風の 篠原 達子 捌 122

走梅雨 下坂 元子 捌 124

台風圏 下鉢 清子 捌 126

野分 杉江 杉亭 捌 128

柿熟るる 文韻 久美子・志げ子・淑子 捌 130

拝み太郎 瀧川 雅代 捌 132

鰯雲 両吟 利子・壽子 捌 134

色無き風 橘 文子 捌 136

塩の道 田村 満子 捌 138

歌

仙

◇

猫
柳

冬と春かくれんぼして猫柳

午後から風の荒るるきさらぎ

二丁目に思ひがけなく雛の出で

笑ひ顔する 怒り顔する

待宵をちよっぴり鬱となつてゐし

そろりそろりと穴に入る蛇

空にまで燃えうつりけり紅葉山

すっぽんぽんで寝まるならはし

ラーメンのあとの匂ひが氣にかかり

いざとなつたら錢で済ませる

隠れ家は近江の国の懷に

北を埋むる雪しまきなり

流行の見せばらかせるスキー靴

学生寮でイツキイツキと

響くロツク夏の満月揺れはじむ

鯉遊々と泳ぐ古池

花散りて十一面の大頭

村人集ひ草摘みに行く

膝送り

東 草 古 平
間 館 井
明 時 曹 照

彦 人 雅 敏 雅 彦 敏 人 彦 雅 人 敏 雅 彦 敏 人 彦 雅

そのあとに勘三郎の影ナオ臘

ティラミスつくる姉といっしょに

肩ふるる出這り口の小鳥籠

三社祭の遠き歓声

爆撃の楯に市民を集むると

唇を合はせる戦場の砂

なるやうになれがはやなるやうになり

たった一度で孕むあはれさ

月明の百年祭はすぐそこに

えんまこほろぎうすばかげろふ

すさまじの胸の肋のくつきりと

山婆となる夢のまにまに

冬ナウ枯れの野辺の送りの煙たて

畦に交はる街道の辻

子を連れてビートル連れてお散歩に

行進曲はトランペットを

花容れてほっとふくらむ庭の闇

旅の半ばに暖かき雨

平成三年二月十七日 首尾

於 俳句文学館

人 敏 彦 雅 人 敏 雅 彦 敏 人 彦 雅 人 敏 雅 彦 敏 人

甘草も

甘草も十四五本や芭蕉庵

苔のむしろを濡らす滴り

ブラックバス洗鱸を食膳に

猪口はいつもの備前とり出す

月高し民話佳境に山の宿

西瓜のとなり鈴虫の籠

逝く秋の書類袍をふくらませ

捨て猫撫でて来ぬひとを待つ

たはぶれのダイヤルQ2馴れ初めで

特別授業先生と僕

待降節真赤な月が覗き込む

のっぺらぼうの穿いた紺足袋

徒に山の手線をふた周り

カメラ安売ビデオ激安

外人の出稼ぎ急に殖えてきし

西郷さんもぎょっとしてゐる

花の幕薩摩白波いっき呑み

目路のかぎりに立てる陽炎

秋元 正江 捌

東明雅

林宗海

原千町

市野弘子

海野利昭

鈴木千恵子

真田光子

秋元正江

恵

雅

町

雅

昭

恵

弘

江

海

町

ナ
渡し舟舩を抱へし下校の兒

館林在茂林寺の住

ふくろふも名物めいた貌をする

マントルピースの上のミネルヴァ

ワレンを掻きあげる度燃えさかり

別の男が使ふ齒刷子

鳥兜岩見銀山恋の果て

かぼちゃ喰ひ過ぎ腹痛の月

運動会敢闘賞は夢だった

竹馬の友も既に八十

からくりのやうにがらりと世の変わる

ナ
損失補填腑におちぬこと

蚕豆の皮剥きながら受話機持ち

噴火の町につかぬ連絡

ローマからボンペイ迄の砂埃

春の来りて気分あらたに

初花に刺繡佛を棒ぐ尼

若きシテ舞ふ弥生狂言

平成三年七月七日 首尾

於 関口芭蕉庵

光 雅 海 町 江 恵 昭 雅 弘 雅 海 町 光 昭 恵 江 町 雅 光

蜻蛉

市野沢弘子 捌

馬の背に群るる蜻蛉や山の牧

吾亦紅越し白き昼月

風炉名残正客の席ゆづりゐて

指しゃぶりつつ熟睡深き嬰兒

海岸の駅舎に下ろす旅袍

新年号の付録いっぱい

曇^ウ天の氷雨となりぬ夕霧忌

枝折り戸そつと訪ね来る闇

あの人のくどき文句は未然形

減量めざしまたもジョギング

水道管工事の道路行き止まり

辱暑に叶ひどんと尺玉

短夜の月をかこちてゴルパチョフ

注がれてさらに強くなる酒

鬼手佛心刀を振ひて悔い持たず

観光ビザで稼ぐ掃除婦

大久保の煙草屋の角花万朶

春の蜜柑を爪立てて剥く

市野沢弘子
原田千町
坂本孝子
上月淳子
宮脇真彦

淳孝 淳町 同彦 孝彦 孝町 淳孝 町彦

ナオ
霞幕出で狂言を舞ひ始む

ちよっぴり呆けているも愛らし

ぼんぼんと古き時計のゆるく打ち

鳥獣虫魚揺れる方舟

ピアスして殿方同士棲むも憂き

貴腐の葡萄酒口うつしする

新真綿包みて骨ちくののどぼとけ

ルート16遠ざかる夏

独房にひたすら恋ひし故郷の母

植物図鑑かへではさみぬ

月明し誰が弾くやらハープの音

色なき風の渡りゆく谷

ナウ
深々と懐手して日向ぼこ

じゃんけんいつもちよきを出す癖

親バカの親似のバカとけなしたり

どっしりとして松本の家具

花片を払ひて窯に火を入るる

かぎろひの空仰ぐ老匠

平成三年八月二十八日 首尾

於 俳句文学館

彦 弘 町 彦 孝 町 同 淳 町 孝 彦 淳 町 彦 孝 淳 町 彦

秋澄むや

秋澄むや藍の表紙の連句集

踏み石かくし咲く秋海棠

月今宵微醺の人の謡ふらん

猫をかまへばついと横向く

描きなづみ絵筆くはへて思案顔

大根・蕪積んで朝市

宰相は可も不可もなく冬帽子^ウ

脱いでみせてよ何故か気になる

チヨコレートのやうな景色へハネムーン

ローマの広場鳩の飛び立つ

掃海艇どこまで帰って来たのやら

解熱剤とてみみずこっそり

爆竹を鳴らし弦月関帝祭

子とろ子とろとこわい鬼出て

時計店刻告げる針まちまちに

浮世の事はなる様になる

花吹雪しるべたよりに嫉捨へ

春の電車は川沿ひを行く

内田 麻子 捌

山口 みづゑ

内田 麻子

上月 淳子

八角 澄子

高瀬 美保

岩田 玲子

森本 郁子

淳子

玲子

保子

郁子

淳子

澄子

ゑ子

保子

同子

玲子

郁子

永^{ナオ}き日のロビーに匂ふレモンテイ
南吉童話幼児に読む

植木屋は季をはかってやって来る

主の留守を知るや知らずや

一線を越ゆテキーラの酔の闇

四十八茶に百鼠色

店頭に出づっぱりなり海老・鮪

未だ未だ現役水仕裁縫

万と言ふ会員の居るゴルフ場

泡沫商社はやき逃足

切通し幻の騎馬白き月

悪友に似し案山子傾^{ナウ}き

父の忌の近し其処此処曼珠沙華

笑ひ仏を日照雨すぎゆく

指物師仕事仕舞の膝払ひ

細螺おはじきまだしまひ持つ

妹と揃ひの草履花衣

影のひまなく上る若鮎

吉
沢
淑

玲 麻 澄 淳 澄 淑 ゑ 保 麻 ゑ 淳 郁 保 子 玲 淳 保 ゑ

平成三年九月二十六日 首尾
於 房連庵

新涼の

新涼の清けさ嬉しほの淋し
 萩咲きこぼる垣の一むら
 指さすは月の異名を教ふらん
 漢和辞典に記すマーカー
 宅配の溪流水をギヤマンに
 胸まで長き靴の鮎釣り
 音高く前輪駆動走り抜け^ウ
 無菌栽培彼も私も
 きぬぎぬのコーヒークップに目を伏せて
 色奔放な壁の油絵
 念願の歐洲めぐり旅鞆
 着々地歩を築くエリツイン
 雪原に大角鹿の悠々と
 湖渡る厳寒の月
 住職は玄人はだしチェロの技
 住にもたれ欠伸する婆
 返り雨けふを限りの花ならん
 草の団子は売れ残りたり

梅田 利子 捌

梅田 利子
 八角 澄子
 蒲原 志げ子
 篠原 達子
 若尾 よしえ
 山崎 一恵
 龍川 雅
 志代
 達
 代
 同
 恵
 達
 澄
 え
 恵
 代
 達

ナオ
定期船春飛魚の群眺めゐて

開聞岳の裾はなだらか

なにかばい
啖呵売つい立ちどまる好奇心

ワタシインデアンウソツカナイ

神様は背任横領許すまじ

いつか育ちし腸のポリープ

ありなしの風に風鈴一点打

ぼかしの蚊帳に川の字になり

枕酒交せし果の夢うつつ

リズテラーは八度目の婚

月仰ぎ愛犬ひと抱きしめ

秋場所稽古綱をめざして

ナウ
長寿得て文化勲章晴れ姿

古き洋館並ぶ舗道

刺しかけのクロスステッチあと少し

餌付けし鳥のねだり来る頃

六義なる詩苑に花の咲き満ちぬ

春興の座に和む吟声

恵代志達代達恵澄代え同志達澄恵利え

平成三年八月二十七日 首尾
於 六義園

梅雨寒の

梅雨寒の灯の親しさや文学館

卓に置かれし桜桃の艶

帰省の子馬引き出して大川に

いつもロックをイヤフォンで聞き

月白を弧中におさめブーメラン

秋味燻す煙香らせ

^ウ粗塩に升傾けて新走り

ドレスウオッチちらと眼をやる

伊達ぶりはあの娘を落すまでのこと

逢引の度うける折伏

建替へのビルを引越すお稲荷さん

軒の氷柱を照らす月影

鴨南蛮七味真つ赤に風邪封じ

マグマ荒れても島を離れず

パソコンにノイズしつこく現れぬ

収支決算合はぬ家計簿

思ひ切りおしゃれにきめて花衣

春泥つけしペダルかるやか

大窪 瑞枝 捌

大窪 瑞枝

坂本 孝子

佛淵 健悟

市野沢 弘子

梅田 利子

孝子

弘子

悟弘

弘悟

利悟

悟利

孝悟

同孝

悟同

利悟

孝利

弘孝

弘孝

ナオ
長城の遥かに霞む嘉峪関

瘦身かがめ飽かぬ篆刻

政策もなく頑なに保守嫌ひ

師走相場は強ふくみなり

フェラーリとボルシェの並ぶ駐車場

帯解くたびに絡むしがらみ

有明の乳房に埋もれ紡ぐ夢

幼妻なり木の実弾いて

帰燕はや残る逡巡なかりけり

余生に決意秘める自画像

英検のテキストにつくめくり癖

ウインドサーフィンセルはたはた

ナウ
嬰兒の歩み誘ふ緑蔭に

地べたに売れり耳飾りなど

スタンドの珈琲苦し夜勤明け

蜂撃ち当たる天窓の玻璃

合唱の声吸はれ行く花の空

終着駅に立ちてうららか

平成三年六月十九日 首尾

於 俳句文学館

利 枝 弘 悟 利 同 弘 孝 同 利 孝 悟 利 同 悟 同 孝 利

初 弁 天

初弁天竺の小錢をしたたらせ
 子等の土産に買ひし繭玉
 春炬燵詩集手に味寝せむ
 濡れ縁薄くよな埃して
 桜葉降る昼月の石畳
 いつもの時刻犬つれし人
 見^ウはるかす湾の彼方に潜望鏡
 ナナハン飛ばす俺とあの娘と
 抱擁の頬に痛みのヘビメタ
 守宮棲みつく北向きの窓
 掃除まで代行にさせ主婦欠伸
 中東開戦テレビ釘づけ
 夜なべして校正の朱の滲みがち
 今宵の月に山も静まり
 老僧の食道楽は土瓶蒸し
 津軽訛で長いお叱言
 満開の花そよ風に散りこぼれ
 ふざけながらに遠足の列

金久保淑子 捌

金久保 淑子
 田 村 満 子
 中 川 哲
 蒲 原 志げ子
 豊 田 好 敏
 本 田 八重子
 敏 哲 敏 八 満 志 哲 同 敏 満 同 志

ナオ
城郭を巡り出くはす孕鹿

撮った写真はみんなピンボケ

着飾りて拍手に応ふマタドール

投げし銅貨のちゃりんちゃりんと

爛酒をまづ神棚にちよっと上げ

Q2電話空つ風吹く

お宅族ヌード写真に囲まれて

抱いた女の髪を蒐集

街鴉啞々と一声こちら向き

三代続く煎豆の店

名月に佇む路地のなまこ壁

ナウ
勝った相撲を祝ふたにまち

美術展タレント画家が入選し

サナトリウムの廊下板ばり

待ちかねし便り届ける郵便夫

脇街道を急ぐ自転車

やすらひの祭赤熊に花万朶

水の流れに揺るるクレソン

平成三年一月十八日 首尾

於 鎌倉 新田中

八 淑 敏 哲 志 八 満 八 哲 志 満 八 哲 志 敏 志 哲 八

初東風の

初東風の光溢るる大路かな

春着の人の賑やかな声

釣釜の自在の鉤をかけた了へて

一輪挿しに匂ふ紅梅

若駒の四肢のびやかな月の原

エアロビクスにはげむサークル

漱石^ウの文学全集点訳し

酒の力を借りて告白

メッシーもアッシーさへも意のままに

たてよこななめ蟻の行列

苦力の舟荷降ろしに汗流し

面子重んじ戦勃発

暁闇のモスクの上に月浮かぶ

石版画観る画廊さはやか

休暇あけ長逗留の孫帰り

居間を転がすファジイ掃除機

円覚寺りすの遊べる花の梢

家苞に買ふ栄螺常節

加藤道子捌

加藤道子

東 郁子

杉 江 杉 亭

立 原 弘 次

本 屋 良 子

松 田 多恵子

野 瀬 知 佐

多 佐

亭

郁

良

佐

亭

郁

次

良

郁

佐

す
のどかなる米寿の祝子だくさん

写るんですよ使ひ捨てても

のみの市掘出しの品見つけたり

練炭火鉢煮物ことごと

越中は廣貫堂のかぜ葉

じれったいのは朝の連ドラ

この頃はダンス教室爺の恋

後生だいじに卵にんにく

書きあげし臨書王義之眺めをり

月をたよりに上着たたみて

山脈をかすめて西へ雁帰行

池に顔だす敗蓮の群れ

ナ
往くものは水の如しか半世紀

ピアノ教へる午後のひととき

猫眠る安楽椅子に深々と

塩をひかへて作る浅漬

幻の花を訪ぬる旅の宿

遠く近くに陽炎の立つ

平成三年一月十八日 首尾

於 鎌倉 新田中

多 郁 良 次 道 良 郁 亭 良 多 次 佐 亭 佐 次 多 次 道 亭

木犀

加藤 治子 捌

矢作川風は木犀運びけり

月影乱す岸の漣

さんま焼く箸に炎の移り来て

自慢の甚句友の鼻唄

つゆ明けの雨が網戸を洗ひゆく

麦藁ぼうし誰かわすれる

万感^{マンカン}の思ひ秘め結ふさつこ髷

紅差しゆびの少し細りて

美しき嘘もりあがる披露宴

ほっと息つぐ夫婦熱年

癪の種ばかりのひとひ続くなり

門中墓は五百万円

凍月に瓢々として世捨人

己の枝の梟をきく

失言に首相のいすも定まらず

刺客のごとく黒子窺う

神苑に児等かくれんば落花舞ふ

蝶ひらひらと軽やかに翔び

加藤 治子
大谷 規美子
月山 壹
繁原 敏女
奥村 伊代子
武村 利子

同 女 美 女 美 女 利 治 女 治 女 美 利 代

ナ
オ
春雷を弾みに柱時計鳴る

表紙賑はす大字若貴

いつまでも取越し苦勞つづく親

フルムーンパス贈られて候

化粧塩笹にこぼれて夏料理

藍匂ひ立つ湯上がりの君

その肩に菌形のこさん閨の床

ミニスカートの今年流行

遮断機のはねた向こうに消えた女

恍惚の境まだ先のこと

ゴビ砂漠ぐるり地平に月まどか

孫のみやげはくるみ人形

ナ
ウ
気疲れをばさりと捨てて秋の浜

商品名の残る煙突

三毛がきてほんのちよっぴり水を舐め

旁忘れてひらかなで文

花爛漫うからやからの誘ひくる

ワルツの調べ春の足音

佐
藤
俊

利 治 壹 美 利 同 女 同 美 女 美 郎 美 女 壹 治 同 女

平成三年十月八日 首尾
於 矢崎宅

初 蟬 の

初蟬の声遠のくや句座ひらく

ほろりほろりと籠の夏萩

ハンモックあどけなき児のまどろみて

自動車免許早く取らねば

十字路に月を写せる道路鏡

雁の行方を仰ぐ人影

そぞろ寒ホームズさんの長談義

公爵夫人のおあひては誰れ

禁断の掟をくぐる僧の恋

たかが奈良漬酔ふは小心

銀行の暗誦番号又変へる

もらはば萎むボーナスの夢

とりあへず月に蓬萊たてまつり

関白の留守家内安全

替え玉の試験如何とさそはれて

反省猿も疲れ居るらし

たぎつ瀬の舟に降り込む花吹雪

細めに開ける春の障子を

蒲原志げ子 捌

蒲原志げ子

式田和子

小原正子

松田多恵子

金久保淑子

本田八重子

対馬洋子

淑正和

淑和洋

和洋

多正

正洋

洋八

八淑

淑洋

洋八

八淑

淑洋

ナ
両脇で支へて廻す大茶盛

雨孕むとて疼く痛風

ヘボゴルファ―エコロジカルに土飛ばし

懐手して僕は批評家

年下の妻の好まぬ長ぱっち

一緒にはいる風呂はぬるめに

柔肌に残る傷痕うす笑ひ

鬼とも蛇ともイスラムの仇

サミットへやっとお招き赤い国

別邸建る白砂青松

喜寿と古稀うから祝ひて旅に月

備前徳利濁り酒満つ

ナ
取り出して想ひにふける秋裕

礼儀正しく宗家入門

パソコンに社中人名打ち込まれ

釣りの仲間に送る絵葉書

爛漫の花におぼるる山暮し

薄紙のばし雛を納めぬ

平成三年七月十九日 首尾

於 鎌倉おうめ様

多 和 淑 洋 正 多 同 和 正 八 多 八 正 和 八 洋 志 八

凧や

凧や池に沈める鯉の色

籬を越えて光る綿虫

子供等の積木の城の絨緞に

電子レンジのスイッチをボン

剪りとったやうな織月かかりゐる

稲刈りすまし帰る人影

ぐい吞を添へて送らる新走り

FM放送ヴァイオリンの音

飼ひ主も手乗りインコもハイミスで

未婚の母のわたし草分け

昏れそめて湾岸道路車の灯

プールに浮かぶ月のゆらゆら

巴里祭回転木馬客絶えず

少しさびつく鉄の宰相

見応へのあるデスマッチくり拡げ

睨み合ひたる蛙幾匹

駅長の出札改札花の昼

フエーン現象頭痛しきりに

上月淳子捌

上月淳子

佛洌健悟

山口みづゑ

下坂元子

雑賀遊

市野沢弘子

悟

遊

弘

元

悟

元

遊

弘

遊

弘

元

元

ナ才

寺の後継趣味に明け暮れ

窯出しの頃はかり茶を啜る

仲よしこよしスピツと狎

天金の書物並びし父の部屋

媚薬の壘をひそと隠せる

肩すべる絹のドレスの匂やかに

跪きつつ迎ふ男爵

玄冬の船の汽笛の聞え来て

御飯にバターのせるのが好き

月皎々雲仙岳は煙上げ

末枯そめし草のなびけり

ナウ

五十年來莫逆の友

送られし干菓子薄様そつと開け

種袋つけ飛ばすふうせん

お揃ひの花衣着て姉妹

バス遠ざかりかぎろひの立つ

平成三年十一月二十一日 首尾
於 俳句文学館

悟 淳 弘 元 遊 悟 元 弘 𩇛 遊 𩇛 元 悟 遊 𩇛 悟 弘 遊

青 嵐

杖の身のつつまれのるや青嵐
 ゆれて明るし栗の花房
 厨辺に鱧を切る音こまやかに
 たまさか揃ふ家族なりけり
 雁わたる空に見つけし昼の月
 ぼんぼん船の水尾の爽やか
 草^ウの香の満ち溢れたるプロバンス
 クルスの誓ひ破る束の間
 はじめての逢瀬に上がる中二階
 囁き甘き皇子の口髭
 ゆっくりと納曽利の舞の終りたる
 白磁の壺に翳の生まれて
 凍てし月紙漉の里眠るらし
 ひとり修する時雨忌の酒
 さて猫のけふの献立如何せん
 エコロジストの綴るエッセイ
 城跡の煉瓦の母校花万朶
 春星うるむ別れありにき

両 吟

坂 米
 本 谷
 孝 貞

孝 貞 孝 貞 孝 貞 孝 貞 孝 貞 孝 貞 孝 貞 孝 貞 孝 貞 孝 貞 孝 貞

ナオ

おろがめば微笑おぼろに半伽思惟

脳の配線すこし変へたく

ゴルビーの夢ひき裂きし装甲車

理想 独裁 改革 終焉

処女雪に蒼の世界の訪れし

少し遅れて見習ひのごぜ

泡風呂の足の先までいとほしく

もっと苛めて恋の小道具

錦絵を紙魚這ひ出づる虫拂

煮詰まってきた匂ふ塩昆布

月に憶ふ苦節の日々の吾若き

秋ひややかに夜爪切りをり

ナウ
塀越しに榎櫃熟れたる屋敷町

長押に掛けし薙刀の紋

九々いつも同じ所でつかへける

蛇の羽音のさそふたたね

蓋とれば花も散り込む曲輪めし

霞たなびく奥多摩の峰

平成三年六月七日 起首

平成三年十月二十五日 満尾

貞孝貞孝貞孝貞孝貞孝貞孝貞孝貞孝貞孝貞同

新松子

径折れて入る閑けさや新松子

蝓蛸のかすかに昇る夕月

美術展前衛オブジェ中央に

鉛筆を舐めメモにひと言

背伸びしておやつを探す兄弟

息の限りを素潜りの海女

どよめきつ千貫神輿かしぐなり

すれ違ひざま好きなどといひ

もしかしてキッスマークか娘の項

フォルティッシモヘティンパニー打つ

東欧の歴史はまたも血塗られて

みんなずんぐり野生馬の影

標のぼこりぼこりと月を踏み

地酒持ちよる繭玉のもと

うつけとはわらはがことに候か

知らぬところで動く札束

豪華船埠頭はなる花の昼

銀のフォークで春の苺を

坂本孝子捌

坂本孝子

下坂元子

大窪瑞枝

原田千町

山口みづゑ

同枝

町枝

枝元

同

ゑ枝

同

ゑ枝

同

町

同

同

枝

元

ナオ
聖土曜バードレ丸き帽を脱ぎ

麻布狸穴のぼる急坂

鎧戸の開くことなし古館

角ついで出て坐るお櫛

可愛さのあまりあまりて食ひにけり

獵銃重し雷鳴の峪

ボケットにホカロン揉んで始発バス

傘寿の母を看とる還暦

平等院浄土は壁に薄れつつ

椀に盛りたる鰯汁吹く

満月のコロボックルか膝を抱き

野分の風に騒ぐ嘴太

ナウ
やや寒く山頭火忌のめぐりきぬ

よき茶を淹れよ香りほのぼの

キヤスターの代りて上る視聴率

キルト刺し継ぐ村ののどけさ

花に逢ひ友にも逢はむ北帰行

穀雨ひそかに温むる夢

平成三年十月十一日 首尾

於 御殿山コミュニティーセンター

同 枝 町 兎 同 枝 町 孝 元 町 孝 兎 孝 元 兎 枝 孝 町

かなかなや

かなかなや窓開け放つ夕厨

月の暈見ゆ遠い稜線

草紅葉子とファミコンを買ひに出て

おまはりさんと交すあいさつ

石灰石積みたる貨車の停まる駅

梅干す香り辺りただよふ

読み耽る推理小説明易き

あの娘の視線誰が標的

バーボンをぐつと呷ってプロポーズ

ブローニユの森散歩する夢

あざやかに広告塔の抽象画

駐車違反に怒るやーさん

声低く詩を吟じつつ寒の月

颯がひょいと立ちて振り向く

連衆の笑ひに老の翳りなし

塩大福を皿に盛り分け

舞妓さん花のかんざし揺らしゐる

雛納めをすませたる母

真田 光子 捌

真田 光子

村田 富美

小林 千雪

倉本 路子

美路 美路 雪路 雪路 美路 光路 雪路 美路 美路 子雪 美子

ブランドのウェアー競ふ春スキー

瞬間貴族中味からっぽ

山の手線案内板は各国語

公衆電話まだしゃべってる

湯桶より朝の蚊立たす峽の宿

鮎の押鮎笹の葉を添へ

婚約の翡翠の指環質に入れ

夫に似ぬ子の言ひ訳をして

リポーター見て来たやうな嘘を書き

ゴルバチョフさんもっと頑張れ

月隠す雲の流るる六地藏

川越まつり安売りの藪

病みぬきし友を誘ひて寄席の秋

眼鏡かけたりまた外したり

ぱったりと鳥に出合ふ山の径

煙草休憩ちょっと余計に

咲き満ちて花の梢の地に触るる

浮かぶ海市に映る街並

平成三年八月二十一日 首尾

於 新宿角筈地域センター

雪 美 路 美 雪 路 美 同 雪 光 路 雪 美 路 雪 美 路 雪

今日の賀や

式田 和子 捌

中川哲氏の古稀を祝ふ

今日の賀や太鼓の音も爽やかに

童手折りてかざす溝萩

玉兎鏝いろいろ習ふらん

町名表示取り替へぬまま

エアメール名前一行和字で書く

ラグビー試合切符予約す

風花のちらりほらりと東慶寺

未練きざはし伊達な男に

ほろ酔ひのショパン弾きたる指で触れ

ゴルビー助かり世界安心

新庁舎見学の人行列し

待って二時間帰省車に乗る

岩燕翔びたつ先に眉の月

頑固爺は大駄なり

括りたる古書の押箔金色に

階段教室微分積分

池の面に散り込む花を鯉の追ひ

史跡巡りは春風の中

飯	橘	松	鈴	養	佛	蒲	松	山	岩	中	金	黒	雑
田		田	木	飼	淵	原	田	崎	井	川	久	田	賀
隆	文	義	美	葉	健	志	多	光	啓		保	順	
淑	美	夫	奈	子	悟	恵	恵	夫	子	哲	淑	子	遊

ナオ
独り居の母は菱餅搗きて来し

発破響きてゆれるマンション

将門が俺ら守るぜ江戸っ子だい

魂は無明に魄は修羅道

縛られて縛ってエクスタシーの仲

とても年には見えぬ昂ぶり

雪しまく里通り過ぐ神の息

透きとほるやう鮑屑舞ふ

軒忍細々と売る小商ひ

臍の新胡麻ガムでとります

温泉に月を写してはしゃぐ児等

待ってましたと秋の蚊の刺し

ナウ
伝来のからくり時計世に出でぬ

タトラ丘陵超えるジプシー

ラムチョップぶるぶると頬張って

お事始めに様々な夢

植ゑ継がん花と蕉風連句会

うから集ひて揚げる大風

平成三年八月二十三日 首尾

於 麻布十番ブルーペティ

悟

葉

哲

志

哲

タ

藍

遊

夫

千鶴子

一郎

恵

朗

タ

子

敏

子

子

石路咲くや

石路咲くや光集めしひとところ

籬を透きて飛べる綿虫

襖絵を展べひろげたるままにゐて

お茶召しませと捧げくる盆

奥山のかかる民宿後の月

こだまを返し威銃鳴り

スカーフはピエールカルダン秋通路

銀座のことはおしょうばいなの

胸薄く唇厚き妓との縁

なるやうにしかならぬこの頃

恐ろしいウィルス侵入コンピュータ

左遷と知らず受ける盃

どんどこと天満天神夏祭

学者先生すてこの月

猫・猫座犬は犬座を守りをり

籠の鸚鵡の鮮やかな色

花びらに手をかざしては園児達

にしん曇の北ぐにに住む

下坂 元子 捌

下坂元子

山口みづゑ

秋元正江

雑賀遊

東明雅

市野沢弘子

江雅

遊

弘

ゑ

同

雅

江

弘

遊

弘

江

弘

春炬燵残るは爺と婆ばかりナオ

並べ干したる鰻の大小

珈琲はエスプレッソでシュガーレス

ゴルフマージャン競馬競艇

ねずみもち黒き実垂れて御師の家

ぬらりひょん出る蕪村忌の宵

愁ひつつおもきおるどの抱きごころ

昔の君はあどけなかりし

ナンバーワンセールスウーマン颯爽と

サウンドブレイクビルの谷間に

月代にさざめき立ちし海の面

きりたんぼ喰ふ夢の故郷ナウ

にこり酒母の加減の味よくて

即位の礼にそなふ人々

つくづくと「大愛幽情」額の四字

稚魚孵りしか瞳こらしぬ

輪唱の声の楽しき花の昼

風に乗りゆくバラモンの風

平成二年十一月七日 首尾

於 俳句文学館

雅 江 雅 遊 弘 遊 江 雅 遊 弘 遊 江 雅 遊 雅 江 雅 弘 元

青葦の

青葦の葉ずれの音や渡し待つ

蟪蛄の子を探す幼な等

夏座敷ほのかに香の炷かるらん

土産に届く名代羊羹

ワイプロになじみ初めたる指に月

色鳥来るを玻璃越しに見る

芸術祭上下不明の抽象画^ウ

パンダ雌雄をとりちがへられ

出生を語らぬ彼に惹かれをり

外車寄り来てときめける胸

エリートと才女の恋をスクープし

啜りこみたる卵雑炊

月影を踏み一茶忌に集ひ来ぬ

長野五輪に地元湧き立つ

ハーモニカ山の讃歌を誰が吹ける

細々と書く旅の絵はがき

散る花を掌にうけ坂の町

聖ヨゼフ祭尼になる友

雑賀

遊捌

雑賀遊

滝川雅代

山口みづゑ

上月淳子

代子

同子

ゑ代

敏代

好子

豊田好子

ゑ子

敏子

代子

同子

敏子

同子

敏子

敏子

花の雨

きぬぎぬのひと降り込めよ花の雨
 春の炬燵に残る移り香
 子どもはお玉杓子をすくふらん
 ちよつと早目にTシャツを着て
 辞書をひく月天心のしづかさ
 猫の尻尾もやや寒のころ
 秋祭太鼓のひびき遠くより
 葷酒ひそかに山門に入る
 お好み焼塩おにぎりに海苔茶漬
 後ろめたしや捨てし一票
 ワイキキの浜はむんむん人群れて
 浪の間に間に信夫翁浮く
 藤椅子に揺れて眺むる昼の月
 万太郎忌のセルの着心地
 還暦を祝せば教授の髭白し
 葉巻の煙細く流るる
 スキップで少女桜の下を行き
 色糸つけて飛ばす風船

下鉢 清子 捌

橘	今	加	加	中	荒	上	東	下
	宮	藤	藤	田	間	月	明	鉢
文	水	治		あ	宗	淳	雅	清
海	淳	り	K	壺	治	K	雅	子

夢のことさらに覚えず目借時^{ナオ}

妻も妾もソープランドに

マハラジャの隙を狙った恋泥棒

快樂の果はつひに奪衣婆

陽当りのよき山裾の冬菫

サナトリュームの友は笑顔で

幼な児は「オトト」と水槽指さしぬ

鳥羽の港を出でてゆく船

つれづれの筆のすさびに旅日記

ワイングラスに映す夕月

鉦叩き休みもやらず打ちつづけ

自然薯掘って帰る老人

天皇と仇名呼ばるるおほけな^{ナウ}さ

身におぼえなき何のおとがめ

億と言ひ十億と言ふルノワール

ウオッチ消えるマジシャンの技

花吹雪地につく前を掌に

家族揃って雛飾る歌

平成三年四月七日 首尾

於 関口芭蕉庵

壺 雅 文 K 雅 海 壺 海 治 雅 同 壺 海 淳 文

文化の日

余生なほ為す事のあり文化の日

水鶏^{スイケイ}笛吹く橋の昼月

茸飯厨に香たちこめて

ファッション雑誌読みさしそのまま

留守居して春眠未だ深からず

膝に子をのせこげるふらここ

枝移^ウる野猿万朶の花散らす

頼み頼まれカメラ撮り合ふ

断食の女性貰ひし平和賞

仏陀の螺髪ぎつしりと埋め

来世は修羅畜生に化するとも

枯れたふりして愛憎の渦

寒の水ぐつとふふみてプロポーズ

虫歯も欠ける堅き煎餅

夏の月巨大クレイン動かざる

五輪準備の進むスペイン

髭黒き若き漁師に尋生ふ

蛙塗^{カマツカ}りすめば初蛙鳴く

杉内 徒司 捌

杉内 徒司

秋元 正江

東 郁子

鈴木 千恵子

今宮 水壺

山田 和久

倉本 路子

郁 路子

江 路子

江 惠

同 惠

江 同

江 同

久 郁

久 郁

郁 壺

路 壺

路 壺

遊びすぎ冷烟節と洒落てみる^{ナオ}

眼医者に通ふ久米の仙人

入れ込みの出湯の辺り夕まぐれ

子に買ひし靴すこし大きめ

お歴々わたしや目高の魚まじり

ノンブル落ちの古い歳時記

先生と今も夫を呼んでゐる

彼女からよと電話取次ぐ

お小皿が宙をとんだりいたします

見世物小屋の侏儒はつらつ

ふるさとの月恋ふ獣^ビもありぬべし

零余子の蔓をそつとたぐりぬ

「お富さん」歌^{ナウ}って逝きしそぞろ寒

迦陵頻伽も共に囀づる

若鮎の弾ける腹の白きこと

エッセイを書く麗かな岸

賑やかに灘の銘酒で花の宴

陽炎追ふて誰彼の旅

平成三年十一月三日 首尾

於 関口芭蕉庵

江 壺 江 路 同 恵 路 久 同 江 壺 恵 郁 久 江 郁 壺

終戦日

今年まだ蟬声聞かず終戦日
 空の青さを透かす昼月
 大壺に芒ひとむら活け込みて
 椅子にふかぶかすする珈琲
 出席と返事を出しぬ同期会
 初荷車の旗をなびかせ
 雪^ウ国の倉極彩の鍔絵あり
 うしろ姿のはんなりと佇つ
 タレントのあれは昔の隠妻
 いかさま物のルイビトン買ふ
 還暦を過ぎて右脳悪くなり
 母驚かす帰省子の酒
 月涼しホルン唳々響きつつ
 海の泡より美神生まるる
 「悪魔の詩」世界に刺客送られて
 あっけらかんと囀る煎餅
 四五匹の猫が見てゐる花見時
 春シヨール取り会釈して過ぐ

副島久美子 捌

副島久美子
 大窪瑞枝
 原田千町
 上月淳子
 福井隆秀
 中川哲
 同
 秀枝
 哲
 町
 哲
 秀
 淳
 秀
 哲
 枝
 同
 秀
 枝
 哲
 町
 哲
 秀
 淳

暮^{ナオ}れかねるコートにテニス未だ続き

男女共用厠行列

安売りに人押しのけて汗しとど

ぱりぱり乾くシート真白

どのボタン押せばどうなるオートメ化

町工場から本田・松下

強力の足どりしかと重き荷を

怪鳥の声に総毛立ちたる

黒人にかき抱かれて闇に溶け

本番ですとひとそと寄り来し

楽屋番坊主の月でひと稼ぎ

やがて行くべき道におく露

粧^{ナウ}へるロッキーの裾旅果てり

レンジの横に火伏札貼る

過疎村に居を定めたる陶芸家

川の岸辺に夢を見る蜚

語りつつ憩ふベンチに飛花しきり

幼稚園児のはしゃぐふらここ

平成三年八月七日 首尾

於 俳句文学館

秀久町枝町枝町哲枝淳町淳秀町淳町哲枝

天長節^{ナガサカ}移り変りてみどりの日

ファジーファジーと何がどうやら

克也流英語^{キツノリウ}詰^{ツメ}錆^{サシ}びしまま

寄せ木のわざを継ぐ人もなし

曲屋の裏にひと夜さ木菟^{キウ}鳴きて

伏せし盃^{スベ}滲^{シミ}む寒紅

耳たぶに触れたる息の火のやうに

あなたの腕がちょっと邪魔なの

けとばして使ふ掃除機ふととまり

ふるさと遠し出稼^{イサ}ぎの宿

月今宵子^コを待つ母の門に佇ち

干されて軽きせんぶりの嵩

裂^{ナラ}繪織部の鉢に盛られたる

ボーカーゲームけふも大勝

カセットに入れて又聞くメヌエット

犬と少年砂にたはむれ

花便りはるかに交す姉妹都市

夢のごとくにかかる初虹

平成三年三月六日 首尾

於 山崎宅

利 同 惠 同 元 利 元 澄 惠 元 澄 惠 利 代 利

沙羅

村田 富美 捌

移したる沙羅咲きそめし新都庁
 行き交ふひとのけぶる噴水
 刺しこぎん針目細かく揃ふらん
 ボンボン入れの蓋を掴みぬ
 中空に昇りし月の玲瓏と

鳴子をひけば雫したたる
 セールスマン声をかけくるそぞろ寒

猫を抱きて彼を待ち侘ぶ
 手を取りて布哇へ恋の逃避行
 逆玉もまた生きてゆくみち
 間違ひは人間にあり券売機
 きようは俳諧あした吟行
 雪吊に透かして仰ぐ庭の月
 さしつさされつ熱爛の酔ひ
 円座して嫁には言へぬ夢語る
 青の時代のピカソだいすき
 花冷えの秒針進む時計台
 友の土産に貰ふあいなめ

小林千雪
 真田光子
 村田富美
 倉本路子

雪子 美子 光子 雪路 美路 光路 雪路 光路 雪路 光路 同路

普賢岳春の眠りを妨げぬ

当り外れは天にお任せ

パチンコ狂拾ひし玉が始まりで

魑魅魍魎の魑魅の出る頃

団扇もて誰かれとなく風送る

甚平を着て毛脛かくせず

若き日の千夜一夜に伏字あり

預かりし鍵合はぬ鍵穴

いつの間に親の世界を越えてゐし

抽象画展絵具分厚く

有明に鴟尾くつきりと東大寺

ふと死を思ふ残る螢に

威銃かすかに聞え靴磨く

びたり帳尻家計簿の謎

窓の灯の消えて巨大な団地群

フランスパンをむき出しに持つ

修道女花追ふ旅は恙なく

飛び立ちてゆく苑の小綬鶏

平成三年六月十九日 首尾

於 新宿地域センター

雪 美 光 路 光 雪 光 美 路 雪 同 路 雪 路 光 路 同 雪

永^{ナオ}き日の緋衣の僧目礼し

先づ駐車場墓地削つても

大店も二代つづきのジゴロ風

楊枝銜へて遊野郎来る

汗拭きて下北弁に応じたり

礁の沖にヨットきらめく

燃えられぬ症候群に悩みゐて

それでも心中よりはましかな

検査とて組上の吾を欲しい俤

渾名はたしか深海魚とか

月あげて広場の塑像白々と

踊る輪の波風の盆歌

邯鄲^{ナウ}の音がやみびしと碁石打つ

すつとこどっこい口癖の彼

その昔の石蹴りの原変り果て

社殿にひびくシンセサイザー

小彼岸の花吹雪受く藩校に

鞆轡ゆらす子等颯爽と

平成三年四月十六日 首尾

於 竹内宅

知 世 玲 晃 同 玲 知 晃 知 世 め 同 玲 晃 同 め 知 め

新涼や

新涼や切手折鶴投函す

碧愛らしき路の露草

月の出に山の湖光るらむ

盆高々と捧げギャルソン

ティラミスとチーズケーキがお気に入りに

天瓜粉の子やとつかまへ

振り返る斑猫まざと見つめける^ウ

坪値いくらの荒地出現

思ひ出し笑ひの娘大人びて

のっぱが取柄とあとは語らず

朴落葉月をよぎりて土に触れ

マスクの中にこぼしたる咳

讃美歌の「聖なるかな」はうる覚え

板さん癩性みがく俎

香港は日本料理が大もてで

地球の人はみんな友達

轟沈の海に散りこむ花ならむ

蟹気楼立つ町の静けさ

両吟

中田淳子
中田あかり

同子り子り子り子り子り子り子り子り子り子

ナオ
風船を配るも仕事ちんどんや

ぶん取り勝の総裁の椅子

トゥリリンガル故郷あつてないやうな

ひだ陰くらき夏富士の月

黄鶯の林に近く叔母ひとり

問はづし来るは誰やら

拒めども肌に消えざる印押され

岩囃む浪にはしるをのき

托鉢の僧の草鞋の真新らし

透明人間小銭チャリンと

月の暈東京タワーけむるごと

手拭ひ袋に手土産の栗

ナウ
去来忌に煎じ薬のまだ沸かず

瑞宝章の透ける宝玉

アルバムのわんぱく連が横を向き

鳴きまねごっこ大の仲良し

花の駅改札口をかけ抜けぬ

働蜂の群るる紫雲英田

平成三年九月二十六日 起首

平成三年十月三日 満尾

於 中田宅

子 り 子 り 子 り 子 り 子 り 子 り 子 り 子 り 子 り 子 り

棟の花

川に添ひ棟の花の散りぬべし

梅雨蛸の鳴き初むる頃

バンガロー集ひ来し子等にぎやかに

部屋に持ち込む小さきラジカセ

勝相撲名乗りを受くる月の下

盆地の上を過ぐる雁

公^ウ募展出品多し秋闌くる

美大音大エリート^ウの群

北斗星かたぶく迄を語りゐし

よろめき縫がる甲板の恋

五十億夫の遺産をふところに

今川焼がだいの好物

月凍つる猫の棲みつく無住寺

山姥めぐる谷を吹く風

壁登るアルピニストは息をつき

穴太^{あのう}の衆の積める石垣

古文書の記録にありし里の花

琥珀のパイプふかす麗か

八角澄子捌

八角澄子

瀧川雅代

山崎一恵

下坂元子

子恵代子 同代恵 同元代 同澄代 同元代 同利恵 同琥珀

春^{ナホ}暖爐ボーカゲームきりもなし

首都伯林と決まる速報

勇ましく軍靴響くは悪夢にて

忘却し得ず又君の名を

優曇華の咲くにも似たるもの想ひ

弱きを助く男一匹

南方に禪用ふ部族あり

樹々も獣も神を宿せる

下がりゐる氷柱ぶち込みコップ酒

ラーメン仕込ぼつりぼつりと

名月に輝く薔紫禁城

何処に飛びし池の蓮の実

鳩^{オウ}の杖なじみてきたりすすろ寒

団十郎の芝居かかさず

皇女様引目鉤鼻下ぶくれ

染絵の箱に細螺おはじき

花の旅日本国中打ち連れて

翳もよぎらぬ朝寝たのしむ

平成三年六月二十三日 首尾

於 鎌倉谷戸

元 同 恵 利 代 恵 元 恵 利 代 利 元 利 澄 利

震災忌

この川の沸きしことあり震災忌
 身に泌むばかり色のなき風
 月の座に見知らぬ顔も交りゐて
 控への部屋に琴と短冊
 タレントのブーツに戯れる猫二匹
 冬休みにもしかと勉強
 衿^ウ卷の中につぶらな瞳すゑ
 巴里帰りの白晢の彼
 素封家はつぶれ噂もよう聞かず
 微に入り細を舐める御器嚙
 熟したるメロンの如き月昇る
 共産党の解散に遭ふ
 世界地図拡げて憮然老教授
 離縁の妻に電話かけをり
 伊邪那美を追ふて伊邪那岐坂を越ゆ
 尻もちついたここが絶景
 レガッタを競ふ対岸花の雲
 鐘の響と共に行く春

原田千町捌

原田千町
 福井隆秀
 海野利昭
 杉内徒司
 山田和久
 鈴木千恵子
 今宮水壺
 秀司
 壺子
 同司
 昭町
 壺昭
 司

蜂^{ナオ}の巣を採るとわんぱく集まりて

蔵で見付けし北斎の版

本造り大辛口の誉れ酌む

言はれ覚えのあるやうでなし

ひよっとして君が五才の髑髏^{されとうべ}

佃祭で捻り鉢巻

燃え上りわたしどうにも止まらない

得意技なら愛の転回

金銀のメダル互に分かち合ひ

土産に貰ふ松茸の籠

明月を残して発ちし終列車

療養所にて雁の声聴く

咳^{ナウ}き込んで悶へ悶への子守唄

勇樹裕介雄太流行

山脈の遙か彼方に夢結ぶ

恙なく翔べ和製ロケット

花はいま爛漫として記念塔

串田楽の四角三角

平成三年九月一日 首尾

於 関口芭蕉庵

久子久 久子 久子 秀同 久同 秀同 秀同 子司 子司 久同 司同 司町 昭

武蔵野の

両吟

武蔵野の狭庭なれども初雀

色新しく敷ける福藁

楽譜持ち母のレッスンあたたかに

壺へいっぱいミモザ活け込む

窓の辺に潤みてかかる朧月

羊を追って帰る牧童

引き直すスケッチの線氣にいらす

女人高野の塔の重なり

愛憎の愛極まりし刃物沙汰

美は乱調となりし運命

山の端に入る夕日のあかあかと

鰻ざわめく月の角店

無精髭まさぐりつ呑む冷やし酒

コロンボ刑事事件解決

政治家のかみさんいつも隠れ蓑

壁の小面かすかほは笑む

原稿の筆よくのりて花明かり

元氣な蛇につきまとはれぬ

原 福
田 井
千 隆

町 秀 町 秀 町 秀 町 秀 町 秀 町 秀 町 秀 町 秀

春泥に落ちたゴム輪の無限大

宅急便の運ぶ総菜

微熱なほどこか妖しき夢をのみ

火星人とは既にお馴染み

パニックのとはラジオのドラマとは

炬燵のなかでサインする脚

雪を来てわたくしはもうとろけさう

深き吐息に重文の匣

奉納の笙箏の太神楽

ナマにはあらでテープ回れる

旅の果てしばし岬の月の海

そぞろ寒さに疼く戦傷

赤い羽根小学生が付けてくれ

本屋の親爺頑固売り物

方位家相十干十二支吉に凶

万愚節またジョーカーをひく

われもまた花の下にとあくがれぬ

ゆらりゆらりと流れ行く雛

平成三年一月一日 起首

平成三年四月二十八日 満尾

秀町 秀町 秀町 秀町 秀町 秀町 秀町 秀町 秀町 秀町

行く秋や

文 音

行く秋や齒にしみとほる宗祇水

汀にたちし月の小波

運動会ワルツの稽古にぎやかに

ジャム仕上がりてつくるワッフル

読みかけの本を露台に伏せ置きて

落葉松若葉透かす木漏れ陽

SLの轟音あげて登る坂

三脚立ててカメラ放列

秘めごとの女優の恋は表沙汰

年やお金はあたし目じゃない

賽子の丁か半かに命賭け

月夜に狸ちよつと浮かれる

ジョギングの息白き列続きゐて

クルス仰げる丘の教会

潮風に向きを変えたる風見鶏

解放されし笑顔人質

お袋の手料理重箱花筵

ままごと道具陽炎の中

福井 隆
本屋 良
加藤 道

秀子 秀子 秀子 秀子 秀子 秀子 秀子 秀子 秀子 秀子

ナオ
峰々に鳴り響きをり鐘供養

戦友偲び忸怩たるあり

ワイプロをたどたどしくも打ち始め

ユーモア話術カルチャーで聞く

居酒屋の親爺の綽名源五郎

鰺鯖鯉虎魚皮剥

どこまでも幾何学模様つづく壁

決闘なんぞと鞘当ての果て

手を取りて死出の旅路の生さぬ仲

胡弓の響すすり泣くごと

図らずも一首を得たり居待月

逃してやりぬ土間の蠅螂

ナウ
稲刈りに村の若衆も駆けつけて

膝のほころぶボンジンズ

古物屋の店にちんまり唐人形

修二会の廊に松明を浴び

芳野にて南朝跡の花尋ね

空にかかりし大き初虹

平成二年十月二十三日 起首

平成三年三月五日 満尾

秀 道 良 道 良 秀 道 秀 良 秀 道 良 道 秀 良 道 秀 良

身一つや

独吟

佛
渕

健
悟

身一つや冬の木立の人めきて

楳の宿恋ふ旅人の影

遊戯室歓声上がる輪の中に

ブリキのバッジ胸に付けられ

月明り時計文字盤くっきりと

ちちろ跳ぶなりたばこ買ふ路

裂帛^ウの気合ひ籠れる芒の家

面を外せば碧い瞳の女

舞踏会ハート抜かれてくたくたに

階下にひそと呼ぶ声あり

正露丸糖衣が欲しと祖父起きる

月に濡れたる井戸端の瓜

夏休暇富士を映せる湖に

ドライブショット真つ直に飛ぶ

先生のお国訛が良く受けて

何やら読めぬ顕彰の文字

丹の橋は浮く如くなり花の塵

狭いながらも雛に御酒添へ

ナオ
亀鳴くと言へば俄に心急き

シエルブル港雨は小止みに

さり気なく窓際の刑事^で合図する

馬の動きが少し妙なり

ピコピコと明け白むまでゲーム店

老母の嘆きは木守が聞く

妻子あるひとを待ちをり着膨れて

睦言もせず世直しの夢

三代目チェーン拡大矢継ぎ早

改札口で笑みがふと洩れ

あの月を取ってくれろと病みし友

句集届くは雁渡る頃

ナウ
ジャズ喫茶裏で秋刀魚のことなどを

外国人の出稼ぎが増え

異教徒の眼に神のうづくまる

石の手すりを越えて春風

パソコンのメールで貰ふ花便り

瓶に掬ひし蝌蚪のちらちら

平成三年十一月十九日 起首

平成三年十一月二十一日 満尾

於 西新宿四丁目「宿六」

ころもてふ

ころもてふ古名ゆかしく秋惜しむ
遠き約束成りし夕月

木犀は書斎の人に香りきて

パズル合はせに熱中の児ら

繭つくる虫すきとほる段ボール

葛素麵でひとやすみする

黒^ウ楽の翳のふかみに迷いこみ

利休の妻の恋のせつなき

とがらせた唇誰のものならん

石となりても血潮脈うつ

去年逝きし父のヴィオロン磨かれて

電話かすかに鳴りつづけたる

炬燵よりお前出ろよとつつきあひ

寒月の婆まはす挽き曰

鴛鴦の羽ふくらみて夜の河

町内会の役がまたくる

鬼ひとり胸に棲まはせ花のもと

春雷をきき黙したるまま

矢崎

藍

捌

俊一郎 聖子 好代 時代 道子 祥子 藍好 聖郎 次代 祥代 聖郎

渥^{ナオ}原にうつりゆく世ぞ暮れかぬる

行革ならず去ってゆく人

ひよっとこのお面の下は涙顔

祭囃しもテープばかり

甘く酸いカクテル飲んでやみつきに

愛の告白ゆうもあととる

かにかくに罪のおもひよ妹よ

土蔵の窓はほの明かみたり

浮世絵をそっと持ち出し売り払ひ

場末の路地で喧嘩しかける

いつよりか壊れしネオン月の影

ショートカットが通草スケッチ

稲刈^{ナウ}り機二町三町走らせて

病氣の数を競ひたる仲

子とともに騎士物語読みすすみ

はだら雪間の北の分校

花爛漫巡業テントはり終へぬ

ピエロが跳ねて上がる風船

平成三年十月八日 首尾

於 不善庵

嘉寿

道次好郎 道郎 聖代 美郎 次郎 聖代 藍美 美

秋の扇

なかなか用ある秋の扇かな

休暇明けらし車内満席

月のぼるはしゃぐ嬰兒をあやしめて

オカリナを吹くドミソドレミファ

街角の時計に合はす腕時計

煉瓦屋敷に茂る青鳶

パウロ^ウ祭長きロザリオつまぐれる

エンゲージリング既にぶかぶか

だまされてゐるとは知らず妊りて

頼む阿闍梨も今はみまかり

チンチラもコレット、シャムもみんな化け

乾鮭まがふ婆の胸板

懷手親爺ぶっちゃう面に月

勘亭流で「支度中」也

クーデター逆転劇の揺れに揺れ

煙草が売れぬキオスクとなり

暁の目覚めにしとど花の雨

杉の秀枝にかかる初虹

山口みづゑ捌

山口みづゑ
豊田好敏
篠原達子
大窪瑞枝
雑賀

達枝遊枝敏遊敏枝遊達敏遊枝遊枝遊子敏

ナオ
爐塞ぎの明珍の箸音さやに

浅酌閑談備前ぐい呑

純なるが故に圭角多かりき

片刃剃刀今も愛用

スーパ一の感度の鈍きバーコード

保母と親しきシングルの父

之からは普通の主婦でゐたいのよ

ちりり打ちたる風鈴の舌

縁先を胸張って行く羽拔鳥

表敬訪問我も我もと

西安の良夜に仰ぐ仲麻呂碑

蝗ひそめり深き静寂に

ナウ
稲架くぐりスカウトに來るデベロッパ

洋式トイレ迷ふスイッチ

続々と世界陸上好記録

飛ばすふうせん風によく乗り

花疲れタワラウンジ飲む珈琲

春のコートを無造作に置き

平成三年八月二十八日 首尾

於 俳句文学館

達 彖 達 遊 敏 枝 遊 同 敏 達 枝 達 枝 遊 敏 遊 枝 敏

二十韻
◇

葱坊主

偏差値は知らずすくすく葱坊主

蝌蚪も手を出し足を出すころ

春行くと水彩絵具買ひ足して

評判のよい角のブチック

新都庁そそり立つ街初夏の月

効き過ぎてゐる冷房の恋

父親のない子を生んでなぜ悪い

痩せたキリスト疎らなる髭

あちこちに虫にくはれた松並木

海のかなたはくなしりえとろふ

膝送り

暉峻桐雨

東明雅

草間時彦

雨

雅

彦

雨

雅

彦

雨

茹^{ナオ}でし蟹^{エビ}放り出したる雪の上

初商ひの果てて樽酒

膝立てて爪切る嬬を引き寄せて

ベッドカバーの乱れ気にする

カラオケの流れ病棟夜長し

居待^{イマテ}仰げば齡かなしや

取^{オウ}り込みを忘れしままの秋^{アキ}裕

おむつも取れてよちよちの吾子

花疲れ猿も反省してみせる

虎溪三笑のどかなる日々

平成三年四月二十六日 首尾

於 俳句文学館

彦 雨 雅 雨 彦 雅 彦 雨 雅 彦

水 鶏

「新炭俵」上梓を祝して

深川やむかし水鶏のはしる溝

地下鉄出でて拾ふ片陰

宇宙より眺めし地球輝きて

手を休めずにテレビ見る主婦

掛軸^ウは父の好みし誠の文字

梶の蹴鞠に誘ひあひたる

何処より宿りし命夜の露

ユングフラウの峰に立つ月

ゴルバチョフ・オプザバーでサミットに

目鏡を外し遠く見るらん

秋元 正江 捌

秋元 正江

東 明雅

加藤 K

副島 久美子

桑原 正敬

篠原 達子

K

敬

久

K

神^{ミコ}の座を船虫が這ふ海開き

モーターバイク唸る県道

スピードのカードで決める彼・彼女

酒池肉林は夢の燵炉で

凍月の青々として中空に

回診の医師つづく沈黙

心^{ココロ}の臓移し植ゑたる人の逝く

若布ふりかけ届きたるまま

花前線日本列島染めにけり

砂丘はるかに陽炎の子ら

平成三年七月十七日 首尾

於 深川芭蕉記念館

敬 同 久 K 江 雅 同 達 久 敬

青葉風

市野沢弘子 捌

青葉風一筋の道見えてをり

梅雨の晴間に散策の人

鉄瓶の蓋をずらせる静寂にて

貰ひし菓子猫に分けやる

独立^ウのテレックス来し窓に月

秋ぞ隔たる街の令嬢

窮屈な恋を鴈外雁渡る

ベイエリアにはベカ舟もなし

短冊へ病名そつと告げてをり

常にくさめの出るやうな顔

市野沢弘子

式田和子

秋元正江

豊田好敏

和

江

和

敏

江

和

鰯^{ササ}の卵に酒を酌むが好き

山門くぐり尼も友達

若ぶって無料のパスはご遠慮す

キスは身体に良いと言ふ説

月浴びて真夏の夢と妊らせ

しらじら明けにごみの選別

長崎^{ナガサキ}のクルスの墓標傾きて

稼ぎて送る里の山葵田

花ぐもりお浜御殿に案内乞ひ

東踊りのつけの決まりぬ

平成三年六月三十日 首尾

於 浜離宮恩賜庭園

敏 江 敏 弘 和 敏 弘 江 和 敏

小春日や

小春日や水嵩多き瀬音かな

さざんか敷ける記念館前

封筒の文字に優しさ匂ふらん

たばこくゆらせ煙り輪に吹く

チ^ウェシヤ猫のぬーつと伸びて眉の月

願ひの糸に秘むるひとの名

運動会借りもの競走彼と組み

焼きおむすびは上々の味

いば峠移動劇団賑やかに

羅漢の竝ぶ楼門の中

稲葉 道子 捌

稲葉 道子

若尾 よしえ

町田 順風

小野 シズ

篠原 達子

え

ズ

達

同

ズ

鼯鼠^{ナオ}の飛翔を仰ぐ月明り

弾丸の痕夏草の陰

カンボジア再建誓ふシアヌーク

りえ写真集老いも若きも

人魚姫紅い涙のひと雫

副え木を当てる骨折の腕

自販機^{ナウ}は禁アルコールばかりにて

土塊もたげ穴を出る虫

満開の花に会はんとはるばると

オレンジ運ぶトロッコに乗り

平成三年十一月十七日 首尾

於 梅ヶ丘会館

え 風 ズ 風 達 道 え 風 ズ 風 達 道

秋深む

トスカニーニ流るる窓辺秋深む

月の影さす庭のみぢ葉

新絹を展べし手ざはりやはらかに

双子兄弟機嫌よく待つ

評論家煙草の灰をこぼす癖^ウ

散歩の道でいつも出合ふ娘

差めば携帯電話ふつと切れ

冷素麺の泳ぐ玻璃鉢

山寺の納所坊主の暑気中り

てっぺん好きの鴉うるさし

岩井 啓子 捌

岩井 啓子

山崎 一恵

橘 文子

佛 潤健悟

浅賀 淑代

恵

悟

文

恵

文

ウオッカをバーボンしのぐ世の移り

サーカス一座代々の鞭

もも尻を後ろに乗せて單車駆る

寒風の中ひしと抱き合ひ

鬼のぞく姥捨て岩に凍てし月

ひやりひやりと誰の吹く笛

パレスとは言へど四十平米で

春のゲレンデヤッケ競はむ

湖へ散り込む花の止みもせず

膝の仔猫の伸びをする午後

平成三年十月三十一日 首尾

於 山崎宅

恵 悟 代 悟 代 悟 啓 恵 文 代

七五三祝

岩垂 景翠 捌

嬉嬉として母子連れ立つや七五三祝

落葉散り敷く石の階

トレモロの弦の調べの流るらん

好みの銘の洋酒栓抜く

玻璃戸越し雲行き迅き月眺め

化粧落して夜長妻なり

痴話喧嘩背中合せのそぞろ寒

興味深深アキノ・イメルダ

辛酸の労苦報はれいま祖国

でんわばかりがびいびいとなる

杉江杉亭
加藤道子
橘文子
岩垂景翠

亭 文 同 道 亭 道

群^{ナオ}なして湖畔に眠る小葭切

上がり下がりのサーファーの月

人影もちらりほらりと株屋前

身振り手振りでここを先途と

めくるめく恋はいつでも夢の中

犬猫フーズ間違へて買ひ

晩^{ナウ}学のお世話になりし友多く

釣人の待つ鮒の巣離れ

飛花落花城の空堀埋めつくし

新車を駆って陽炎のなか

平成三年十一月十五日 首尾

於 鎌倉おうめ様

文 翠 亭 道 亭 翠 同 亭 道 文

きりたんぽ

梅田 利子 捌

故郷は有難きかなきりたんぽ

山鮮やかに錦する頃

月の下荷積みを急ぐ船ならん

吸ひかけ煙草足で踏み消す

変^ウり行くベルリンの街腕を組み

啄むやうにキス交し合ひ

孔雀の間羽振はせて新婦立ち

そこはかとなく匂ふ水仙

酔ざめの水一息に飲みほしぬ

またも西武にしてやられたり

八角 澄子

山崎 一恵

滝川 雅代

下坂 元子

梅田 利子

利元

代

元

代

ナ
オ
リ事件の君も私も閣僚に

団扇をかざす小庇の月

爪弾きの新内流し影を引き

ドクターストップ老いらくの恋

神妙に出湯に浸る野猿たち

祠の赤き幟ひらひら

ナ
ウ
チャンバラでいつも斬られる役ばかり

年度替りに決まる転勤

咲き満ちし梢に棲まふや花の精

蜜運びつつ蜂の群れ舞ふ

平成三年十一月四日 首尾

於 山崎宅

恵 元 澄 代 元 澄 同 恵 澄 恵

木蓮の

大谷規美子 捌

木蓮の白大空を埋めにけり

築地塀より亀の鳴く声

春惜しむ小暗き書架のはざまにて

体重五十四匁のまま

冬山^ウにいどむ計画月の夜

彼への手紙ワープロで打つ

恋などはどうでも良いと古稀になり

鬱金の裂れで包む骨董

斂葬の泣き女ぞろぞろ村はづれ

追憶を行く蒸気機関車

由川慶子

月山 壹

矢崎 藍

三岡 鑽次

加藤 治子

大谷 規美子

繁原 敏女

美

壹

藍

鮎落つる

岡本 道子 捌

矢作川水やや荒く鮎落つる

飛機のよぎれる夕月の空

ふっくらと栗お強飯など蒸し上げて

薪割る腕の硬く筋張り

石黒 正子
八木 聖子
後藤 志津枝
月山 壹

国^ウあげて英才教育金メダル

予備校生は屈託もなく

平安の恋読み終へて寡黙なり

忍び車はひそと路地裏

ふかぶかとシヨール巻いても時の人

雪になるのか痛む傷痕

枝 聖
枝 聖
正 正
壹 壹

縞猫^{ナオ}の島中血縁二百匹

墓前のやから泡盛を酌む

ジューパンのやうに男を脱ぎ捨てて

指をからませうらむ短夜

夏の月私いつでも道化役

最終列車トンネルに入る

電話代^{ナウ}気になる程の話ぶり

笈摺似合ふ若きお遍路

故郷は北の国なり花いまだ

蜃気楼たちゆらゆらと揺れ

岡
本
道
子

壹

正

壹

同

聖

枝

聖

枝

正

平成三年十月十五日 首尾

於 猿投台公民館

出水川

出水川ふたつ越え行く柏かな

銀杏落葉のふりつみし道

後の月チーズケーキを卓上に

丸いめがねを丸くぬぐへり

郭公^ウの次の音を待つしじまにて

あなたが買ってくれたTシャツ

ハネムーンハワイの涛の青きこと

出社の前の渋茶一杯

軒並になりをひそめる株屋街

貂の顔してあくびする人

小野シズ捌

秋元正江

東明雅

梅田利子

中里結

小野シズ

結

雅

結

子

江

夜神楽の翁を月に舞ひ納め

解けた禁酒にどっと出し酔ひ

既婚者の婚約不履行どうなるの

金ですませる恋の年輪

夢違ひ観音の指たをやかに

すぐ消え易しらんちゅうの泡

小市民老いにけるかも悔もなし

骨粗鬆症春の炉による

迷ひ子を探す放送花の山

古きあづまや姫蜂の飛ぶ

平成三年十月十三日 首尾

於 光ヶ丘近隣センター

結

子

江

子

雅

結

江

雅

ズ

子

涅槃絵図

数珠を手に退りて拝む涅槃絵図

垣繕ひの終へし広庭

花冷えにピアノ洩れくる窓ありて

犬と少年いつも一緒に

船頭^ウの櫓先を照らす夏の月

ペアのアロハでとばすナナハン

好きなのに意地を張り合ふふたり仲

天井よりも天井が好き

新都庁坐る知事さん誰かしら

カルチャー婆さんけふもぞろぞろ

金久保淑子 捌

金久保 淑子

瀧川 雅代

富山 泰子

八角 澄子

立原 弘次

代

次

泰

代

澄

残る虫鳴いてポツンと赤電話

峡の奥なる自炊湯治場

酔はないのわたしの酒が呑めないの

しなだれかかる漸寒の影

月浴びて故郷を恋ふるフラメンコ

霧に浮かぶはガウディの塔

もう少し続けて見たき今の夢

ほろほろ鳥に餌をねだられ

耀ひて大島ざくら咲き満ちぬ

遠足の児がゆらす吊橋

平成三年二月十五日 首尾

於 鎌倉おうめ様

代 次 澄 泰 代 澄 代 同 澄 泰

雨後の月

虫の音も湧きいづるなり雨後の月

いづ方よりか香る木犀

到来の秋鯖三尾調理して

背の子供をあやしすかしつ

色映ゆるステンドグラスマリア像^ウ

バージンロード花嫁の父

早まった美人こんなに居るものを

何処も同じ湯上がりの顔

襦袍着て屋台の酒を飲みに出る

今川焼を家苞に買ひ

加藤道子捌

蒲原 志げ子

本屋 良子

杉江 杉亭

松田 多恵子

小原 正子

加藤 道子

志

亭

良

正

次々^{ナナ}と夫乗^ナり換へる悪女^{ナメ}ぶり

芸の肥やしとスター嘯く

エリツインの心臓発作ドルを下げ

雷にをのくさい果ての国

木から木へむささびの飛ぶ月の杜

辻の薬師は婆が世話役

嬰^{ナウ}鑠と元氣爺の名に恥ぢず

和布刈る舟戻る忙しさ

分校は桜並木の坂の上

ハーブの糸の光る春昼

平成三年九月二十日 首尾

於 鎌倉おうめ様

多 道 良 亭 多 良 亭 正 志 多

鰯起し

こきりこを買ひて湯宿や鰯起し

青空映ゆる雪吊りの松

堀炬燵アルバム開き子と共に

パークカッションの響き楽しむ

窓^ウ越しの赤く大きな宵の月

紅葉照るころ告げし初恋

ゆれ動く女心に猫じゃらし

じたばたせずに半ば諦め

秒読みのペルシャ湾内波しづか

ガソリン安値増えるドライブ

加藤 治子 捌

繁原敏女

小園好

岡本道子

月山壹

加藤治子

三岡鑛次

好

同

治

女

里唄は鍬ナウすくばの汗のもの

行水しつつ仰ぎ見る月

冥界のひとと契りし夏の闇

卒都婆小町よ嫉妬するなよ

飲めよ飲め酒は菊石薦かむり

ぱっと陽気に派手にゆこうよ

取り出す香港みやげ金時計ナウ

合格祈願多き絵馬堂

笑ひあひ三三五五の花の下

尾根ゆく我を誘ふ小綬鶏

平成三年六月二十六日 首尾

於 棒の手会館

同 次 好 壹 同 同 道 次 道 治

春寒し

蒲原志げ子 捌

春寒し蕾もかたき段葛

初鶯の鳴きそむる頃

甘粕に漬けし鰯をとり出して

電気ポットに入れるスイッチ

ブリッジのビットのコール月の卓

十字架祭の司祭美男子

捧ぐ掌に緋色こぼるる秋拾

佃言問吾妻大橋

紙芝居犬と自転車公園に

おでん屋台で酒は二級酒

松田多恵子

式田和子

岡田かず子

蒲原志げ子

小原正子

和

正

多

正

か

梅林に

梅林に袋菓子分け憩ひけり

見え隠れして子連れ小綬鶏

春炬燵親しき客を招くらん

ファッション雑誌ポストより受け

寒^ウの月ビジネスホテルの窓照らす

ひと目しのびて角巻の女

ひたすらに尽すばかりの二十年

わが頬にあるモナリザの謎

都知事選保守革新と入り乱れ

神へ献酒の俄か信心

倉本 路子 捌

倉本路子

真田光子

水鳥ますみ

村田富美

小林千雪

光

み

美

光

雪

ナ
嬰の微笑昼寝の夢のつづきをり

翁の生家芭蕉玉巻く

妻ならず妻のやうなる人と棲み

ねんごろに剃る長き衿足

寺町の月影よぎる白き猫

ショパンのソナタ身に入みて聴く

ナ
キヨスクにガムを買ひゐるそぞろ寒

ふくらむ鞆書類詰りて

本復の友を迎へて花の宴

蝶と戯れ渡りゆく橋

平成三年三月二十日 首尾

於 深川芭蕉記念館

み 光 雪 路 美 雪 光 美 路 雪 光 美 路

雛納め

来年は持たせやる雛納めけり

つくばひの水ふふむ頬白

とりどりの春の蜜柑を積み上げて

バーゲンセールちらし配られ

ヒル^ウの間の雑踏抜けて月仰ぎ

扉細めにうそ寒の顔

抱き寄せし一瞬とまる虫の声

湯島天神人気なき礎

功罪を問はれ続けて塾栄え

円型脱毛医者の後継ぎ

上月 淳子 捌

上月 淳子

山口 みづゑ

内田 麻子

五味 蓉子

高瀬 美保

ゑ

淳

麻

蓉

保

毒舌に似合ず氷水が好き^{ナオ}

ダックスフント連れてナイター

ウィーンへモーツァルト聴くひとり旅

森くろぐろと響く寒雷

月冴えて恋人たちの影絵めき

老いのほむらの緋の長襦袢

何^{ナウ}ごとともファジーファジーで世をすごし

飯、新聞に寝るとそれだけ

花の門受賞祝ひの客迎ふ

異国の友が指せる初虹

平成三年三月二十八日 首尾

於 房連庵

ゑ 麻 蓉 保 麻 蓉 保 麻 蓉 同 蓉 保

余 寒

半截に筆の乾ける余寒かな

香りほのかに床の紅梅

潮干狩顔みぬ友の噂して

ジーパンの人ベタル踏み来る

細^ウき月かかけて冬の大櫓

そつと寄り添ふ底冷えの宵

出湯宿艶やかさます薄化粧

婦命並^{なうまく}遍^{さまん}金剛^{だば}諸不動^{ごらん}明王^{かん}

キリストもアラアの神も正義なり

海外旅行不安かくせず

小園

好 捌

繁原敏女

小園好

月山壹

女

大谷規美子

月山富佐子

同

壹

美

女

藍浴衣せぬひ一本縫ひ直す

ビールの泡の消ゆる瞬間

あばたでもゑくぼに見える恋女房

描く裸婦像秋の村雨

鳥かしら？ 灯さずにゐて十三夜

糲焼くけむり犬が咳する

縁側ではあさんこっくり夢をみる

ごっこ遊びの幼はしゃぎて

水門の水面に浮かぶ花吹雪

線路はろけくゆるる陽炎

平成三年二月二十六日 首尾
於 棒の手会館

美好佐好

美女同壹同美

葱白く

小林 千雪 捌

葱白く洗ひたてたる寒さかな

ゐろりひらいてかきよせる灰

F1車爆音高く過ぎ行きて

幼稚園児の上ぐる歓声

手作りの団子供へて月祀る

コレクトコール夜長恃みつ

百菊のホテルのキスのまだ熱く

知らんぷりして通る猫又

囲碁将棋・俳画・篆刻・鍼に灸

燥病・鬱病・骨粗鬆症

小林 千雪 翁

東 郁 子

東 明 雅

小 野 シズ

百 武 冬 乃

真 田 光 子

乃 雅

乃 雅

乃 雅

夏草^{ナオ}にすわりよろしき道祖神

山の小径の築守の月

五十年酒と女に飽きもせず

観光ビザで恋を遂げやう

珊瑚礁波の浜辺に肩寄せて

真珠色した鳥になる夢

窯出^{ナウ}しの朝たのしみの九谷焼

両手を挙げて追ひ払ふ虻

花万朶地に触るる枝くぐりゆく

駅前広場ゆれる陽炎

平成三年十月十六日 首尾

於 深川芭蕉記念館

乃 光 ズ 乃 ズ 光 雅 光 雪 ズ

行く秋の

行く秋の天にとどきて上り窯

弓張月は山陵の肩

長き夜母の羽織を借り着して

擦り寄る三毛にグルメ缶詰

栈橋^ウは漁船戻って声が飛び

新車の娘投げキッスする

今はもう離れられない筒井筒

枯葉剤にて生れし奇形児

水くらげ食物通る腸も見え

森鷗外は軍医帯刀

五味
蓉子
捌

五味 蓉子

内田 麻子

塚本 泰子

長谷 えみ子

麻

え

泰

蓉

泰

蓉

探偵はポアロが好きでビデオ貯め

アルペンスキー派手なファッション

窓越しの月の光に納め弥撒

慈善の顔の裏で放蕩

秘めごとをみんなばらして鬼となり

振舞酒に深酔をする

ゆるやかな景気の翳りビルの風

初出社する高き靴音

花びらの散り敷くなかに鍬を打ち

近江の宿で菜飯出される

平成三年十月十四日 首尾

於 房連庵

麻 え 泰 麻 蓉 え 麻 蓉 え 津

大寒や

大寒やさすがに寒気ただならず

ふくら雀の隠る軒先

わらんべの市松人形抱きゐて

キュリオの壺にさはっては駄目

チャリ^ッティのジャズに総立ち月五更

忘れられないあの朝の露

「愛・信・恕」願ひの糸をひそやかに

川波白く足洗ふひと

ミサイルの基地をうろつく犬もをり

便乗値上モツ焼の店

雑賀

遊捌

雑賀遊

佛 洵 健 悟

永 島 靖 子

式 田 和 子

同

靖

悟

靖

和

悟

泡盛を飲み干す夢に母のゐし^{ナオ}

安永朋子

編集長の脛に蚤痕

悟

色黒きばかりか腹も黒かりき

遊

凍てし月影旅行鞆に

悟

ファックスで送り送られラヴェター

靖

モンローウオークハイヒール折れ

朋

神泉の描く鯉の絵賞でて掛け^{ナウ}

同

春田に映る山の灯火

悟

帰り来て散らかし合ひし花衣

靖

草餅盛ってお茶を入れましよ

朋

平成三年一月二十八日 首尾

於 式田宅

川舟の

両吟

川舟の揺れて涼しや遠灘子

かもめの翼かへす白南風

辣蕪畑農夫の憩ふ蔭もなし

市役所だよりひろひ読みする

婦^ウ国せしこと人づてに秋彼岸

新絹染めて贈るネクタイ

失恋も芸のこやしと月を浴び

九連宝燈一世一代

ことごとと煮つめて元祖みそ老麵

ホシが割れたとつける熱燗

坂本孝子

大窪瑞枝

子枝

子枝

子枝

子枝

子枝

子枝

子枝

岩端^{オウ}に寒猿何を嘯くか

感傷旅行めぐる奥能登

少年は国守の血筋美しく

身の隈々にしるす唇づけ

玻璃碗に鰐をすすむる夕月夜

めっきり角のとれし姑

ソビエト^{オウ}の経済援助ゆづり合ひ

四囲の山脈雪解けは急

いづめ籠の夢に落花のしきりなる

光の中へ放つ蜜蜂

平成三年七月二十七日 首尾

於 墨田川舟上

同 子 枝 子 枝 子 枝 子 枝 子 枝

秋霖や

秋霖や客ひと組の料理店

ワイン談義の尽きぬ待宵

初獵の犬の荒息葦の間に

自転車通学軽やかに行く

紹^ウの小紋お浚ひ会に仕立て上げ

変体仮名の読めぬ恋文

ザザビーで競って気を引くつもりらし

ガレの硝子の碧か翠か

幼な児を看とる尼僧の瞳の澄みて

勤務ひきつぐ点呼びきび

両吟

坂本孝子

大窪瑞枝

子枝

子枝

子枝

子枝

子枝

子枝

子枝

暁^{ナオ}の雪割燈に月晴れぬ

寒鰯捌く深きゴム長

フィアンセの部隊は島に玉碎し

抱擁熱く砂にまみるる

通行人A日当は税引きで

送電線に並ぶ椋鳥

高原^{ナウ}にお菓子^{ナウ}のやうな宿が建ち

腰叩くなり鍬を休めて

花浴びつ惜しみつ仰ぐ滝桜

森の巣箱に帰る蜜蜂

平成三年九月十三日 首尾

於 八王子ビストロみささ亭

同 子 枝 子 枝 子 枝 子 枝 子 枝

山笑ふ

繁原 敏女 捌

山笑ふ独居老人輝けり

客をもてなす手作りの雛

春うらら句碑の拓本とらむとて

異空間より誰か見てゐる

夏の月野外でジャズのコンサート

浴衣姿のおっ嬢を呼ぶ

軽き身のあるひは重し胸の内

差し違へたき愛かも知れぬ

約束の時刻はとうに過ぎてゐる

単車爆音いまだ残りに

柿本時代

加藤治子

月山 壹

大谷 規美子

神谷 桂子

三岡 鍬次

繁原 敏女

美

代

治

大根^{ナオ}を抜きたる後の穴覗く

嚏^{ナド}をしてもひびく腰痛

バスタブに二人の量の湯の溢れ

夫に保険とりかぶと取る

雲切れて梢に蒼き鎌の月

温め酒の爛はほど良く

同窓会浪速訛^{ナウ}にふと戻り

積木つみつつ幼児の待つ

花吹雪肩にふらせて道祖神

凧の浜辺に白子干したり

平成三年三月十九日 首尾

於 棒の手会館

美 治 美 代 治 次 同 美 代 美

風光る

式田 和子 捌

天平のくえし瓦や風光る

薄紅梅の匂ふ坪庭

入学帽底目深にかぶるらん

パソコン通信誰か割込む

満^ウ月に妖精踊る夏の夢

ほろ酔ひ女洗ひ髪なり

かりそめの別れとばかり思ひしが

毫碌したと孫に笑はれ

八十も若いと知事の真向法

霏降る日も霰打つ日も

三田 悠之

式田 和子

山崎 光夫

式田 恭子

渋谷 光一郎

三浦 悟朗

安永 朋子

飯田 隆彬

恭

朗

雪原^{ナホ}を駆るトナカイサント乗せ

バルト三国烽起寸前

火をつけてあげたいやうな皇太子

唇重ね涙するたび

東に月傾きて静かなる

ぬき菜味噌汁下宿菊坂

秋寒^{ナウ}の富士に北斎しのびゐて

濃き黒潮の音に育ちし

花に舞ふ人ハイヒール脱ぎ散らす

競ひて拾ふ大茶盛餅

平成三年三月二十三日 首尾

於 青山パークマンション式田恭子宅

彬 朋 之 恭 夫 朗 之 夫 彬 朋

夏越の袂

癒えませと祈る夏越の袂かな

梅雨明け近き空に浮く雲

鍵盤に練習曲の切りもなし

エクレアそつとテーブルに置き

菟^ウ集のコインのクイン笑みて月

蒲の絮とぶ北国の町

根魚釣る男の腕のたくましく

娘盛りのにくき胸もと

証券の損得勘定パソコンで

バブルに幕をおろす年の瀬

両吟

式田和子

米谷貞子

貞和

貞和

貞和

貞和

貞和

貞和

貞和

台風

篠原 達子 捌

台風の名残りの雨を集ひけり

月まつ間お薄いっ服

実ざくろの学生街に熟るるらん

ダックスフントのぞくケーキ屋

迷^ウひ子に若い警官こまり顔

ひよんな同情いつか本気に

わたしよりインコの方が大事な

ひとつおぼえの「アナタスキスキ」

宵祭ろくろっ首も繁昌し

さつま焼酎やぶ蚊打ちつつ

篠原 達子

若尾 よしえ

久保田 庸子

橋本 京子

桑原 正敬

庸

え

同

敬

達

冬^{ナオ}月につりはいらぬと屋台酒

化かし合ひして遊ぶ狸ら

尼さまの悩み差し大鼾

忍ぶ逢引^{くま}枢落として

切通し吹き過ぐ風の蕭々と

戦友会の又ひとり減り

船^{ナウ}旅のデッキゴルフを海に打ち

籠の鸚鵡に語るうららか

里人に真田の城の花やさし

茶店自慢の菜飯塗椀

平成三年六月一日 首尾

於 松月庵

利 代 澄 同

恵 利 澄 同 代 恵

走梅雨

装幀の革の匂ひや走梅雨

エンジェルフィッシュゆらぐ窓際

ファンファールパレードの列眺めゐて

手に丸めこむ飴の銀紙

宇宙服着て月へ飛ぶ孫の夢

溢蚊いでし庭の片隅

かまつかに燃ゆる想ひを重ねをり

恋愛論に彼はたじたじ

コンパスの軸が動きて円ゆがみ

海部総理の重き肩の荷

下坂
元子
捌

下坂元子

瀧川雅代

八角澄子

山崎一恵

梅田利子

恵

代

利

同

澄

年^{ナオ}の功派閥に勝ちし総裁選

山をゆるがす発破師の夢

リズ・テラー八度目の婚記事となり

どのダイヤにも恋の傷あと

暁闇の僧堂照らす寒の月

魚の白骨捨つる涸川

七^{ナウ}十年能登の七尾に住みわびて

番付を貼る春場所のひと

はなごころも熨斗目模様の花の宴

し特急は陽炎の中

東

明

雅

敬

京

庸

え

敬

京

庸

同

敬

平成三年十月十三日 首尾

於 光ヶ丘近隣センター

台風圏

椎檜も台風圏となりにけり

無月の樓にひとり酌む酒

秋灯下新刊本を読み飽きて

宅急便で届いたる猫

ペット屋は血統偽造つぎつぎに

札束を積みプロポーズする

愛人でいいのとそつと囁きぬ

韓国料理匂ふ蒜

おそろしやコレラが街に蔓延し

般若心経手習ひの婆

下鉢 清子 捌

下鉢 清子

東 明 雅

小 野 シズ

渡 辺 秋 景

雅

景

ズ

雅

同

子

足裏に番号が付き初の孫ナオ

BGMでモーターALT聞き

潮騒の浜辺を照らす寒の月

裘着て雪女めく

青き瞳の野性の恋は奔放に

火砕流かと滾る熱き血

湯ナウの宿に烏骨鶏が鳴きゐたり

水車廻りて夢とのどけし

花散りぬ弥撒に集へる人の上

子どもに渡す連風の糸

平成三年九月八日 首尾

於 光ヶ丘近隣センター

景 子 ズ 雅 景 雅 景 雅 景 景 ズ

野分

忽ちに葉裏を返す野分かな

月を待ちつつ仕舞ふ小農具

豊漁の秋刀魚焼きをり家毎に

したり顔して面を出す猫

オペラ座の開幕のベル鳴り終へて

赤き冬薔薇抱きしめて佇つ

外套の男剃り跡青々と

バーボンなれど凌ぐスコッチ

稲荷社の油揚げかすり突き出しに

大法螺小法螺やたら飛び出す

杉江
杉亭
捌

杉江杉亭

豊田好敏

式田和子

亭

敏

和

亭

敏

和

亭

被^ナ写体のモデル嫌がる孫娘

気仙沼から父の日の孝

白々と地表を照らす夏の霜

くびれ可愛ゆき足首の反り

浦里にしのび泣きさす時次郎

劔光一閃触るるもの切る

ス^{ナウ}スメススメヘイタイススメ昭和御代

トランシーバー朧々に

断崖の投入れ堂に花吹雪

雛流しする郷のならはし

平成三年九月二十日 首尾

於 横須賀線車中

敏 和 亭 敏 和 亭 敏 和 亭 敏 和

柿熟るる

文 韻

柿熟るる寺の隣りは公民館

副島 久美子

合唱ひびくやや寒の頃

蒲原 志げ子

揺り籠の笑む嬰に月の移りきて

金久保 淑子

椅子の真下にうづくまる猫

久

窯^ウ出しの壺の絵模様美しく

志

ペアのぐい呑み彼の習作

淑

ファックスで時間と場所の打ち合はせ

久

四苦八苦して金の調達

志

冬晴れを単線電車のろのろと

淑

舞おもしろく会津万歳

久

ナオ
口伝秘守老舗漬物頑固爺

聞こえませんと煙草くゆらす

開戦となるやも知れぬ産油国

やもりはりつく月のハーレム

マニキュアの指くねらせて羽蟻追ひ

精神分裂気味と診断

ナウ
中流も別荘を持つ時代にて

春椎茸の出荷間近に

細き枝箸置きにして花と酒

海見はるかす丘に囀り

平成二年十月二十六日 起首

平成三年三月六日 満尾

志 淑 久 志 久 淑 志 久 淑 志

拌み太郎

瀧川 雅代 捌

まだ青き拌み太郎や庵の庭

秋めく風のはこぶ汐の香

月の下着陸の機を迎ふらん

薄きカップに注ぐ珈琲

アメフトの熱狂ぶりを大写し

木魚まくらにごろ寝する僧

この恋に死ねてふ一語欲しかりき

ふたりを包むにぎりえの闇

鎌倉山狸が餌をお目あてに

煮込おでんの匂ひただよふ

瀧川 雅代

秋元 正江

桑原 美津

長崎 和代

下鉢 清子

和 清 美 同 江

病室をそつと抜け出て会議室^{ナオ}

引きおろさるるレーニンの像

里雀ちんぷんかんの歌ならべ

くらげの紐でしばりたいひと

追縫る砂丘風紋月炎ゆる

荒野の果の影長き墓

電卓^{ナウ}で老酒換算はじきだし

春の炬燵に重ねゐる夢

和やかに母娘のえらぶ花衣

手籠抱へて摘草の子ら

平成三年九月三日 首尾

於 深川芭蕉記念館

江 和 美 清 江 美 清 同 雅 和

鰯雲

若者で溢れる駅や鰯雲

宵月肩にせかる人々

爽節に琴爪の箱まさぐりて

週間予報しるす黒板

ウインドの打掛の箔きらきらと

駆け寄る彼は友のフィアンセ

「どうしよう」後ろめたさの逃避行

南欧の空今日は晴れたり

暑気払ひ酒に染めらる両の頬

祭囃しの笛がお上手

両吟

武村利子

杉山壽子

利子
壽子

利子

壽子

利子

壽子

利子

壽子

小者^{ナオ}よりまづ調べらる金融界

柩の通る路に野良猫

恋文はいつも楷書で白封筒

柚子湯に浸す過去の記憶を

杜に出る魑魅魍魎の凍月夜

中日首位をずるり落ちゆく

故郷^{ナウ}の屋敷いまでは他人^{ひと}のもの

浅蜷売り女も老いて丸まる

花に薰く香炉を選ぶ青磁色

占ひ吉と春の夕べに

平成三年九月二十四日 首尾

於 猿投台公民館

利 壽 利 壽 利 壽 利 壽 利 同

色無き風

谷戸深く色無き風の渡りけり

白露ほろほろ燦かす月

今年米水少なめに炊きあげて

猫も加はる家族団欒

顔^ウ見世の庵看板勘亭流

最肩雛奴と受けるをけら火

制服を脱いでデートも大胆に

核積んだ船知らぬ存ぜぬ

怒声浴び童等蜘蛛の子と散りて

中華饅頭焼印を押す

橘
文子
捌

橘 文子

式 田 和子

豊 田 好敏

本 田 八重子

田 村 満子

岡 田 かず子

敏

満

か

八

御^ナ仏も瞬^トきたまふやうな寒^{サム}

体操選手に宿貸してやる

一杯の水も葉と口移し

機上の愛にエア―ポケット

ぬめぬめと蛇に巻かるる月の夢

電腦通信かさむ料金

故郷^{ナツ}の地酒近頃大評判

絵舩造りて未だ嬰鑠

花万朶文学の道通り抜け

雉の声する叢の中

平成三年九月二十日 首尾

於 鎌倉おうめ様

和 敏 満 敏 か 八 和 文 満 八

塩の道

田村 満子 捌

秋風や昔を偲ぶ塩の道

田村 満子

碑てらす端正の月

蒲原 志げ子

沢胡桃抱き上げし児のポケットに

金久保 淑子

パウンドケーキバターひかへる

志

いま^ッいちも段とつも載る広辞苑

淑

いはましいはでつ^ッのるおもひを

志

見つめられ自意識過剰あたし美女

淑

眉唾ものの婆の夜ばなし

満

釣狐真似て転んだ橋の上

志

ニコライ堂に群るる嘴太

淑

混戦に次のサミット誰が行く^{ナオ}

酔ったふりして立てる聞き耳

衝立の向ふ衣ずれはたと止み

夫の目盗む蟻地獄なり

月面を四駆で走る夏の夢

オリンピックで変はる故郷

哀愁^{ナウ}を奏でるギターフラメンコ

観光船で巡る島々

花の雨露座大仏も共に濡れ

春の埃の積もるガラス戸

平成三年十月一日 首尾

於 志げ子宅

志 淑 満 志 淑 満 志 淑 満 志 淑

白十字

どくだみや茂みの中に白十字

水琴窟の音涼やかに

つれづれに文書き散らし宛もなし

手作り茶碗番茶すすりて

半月がクラゲのやうに浮いてゐる

そぞろに寒き古き軍港

義兄上の眼差し強く鴟高音

秘密の庭にいつも誘ふよ

次々に燻り出されし金融界

そっと消しますへビイスマーカ

月山

壹捌

加藤 治子

小園 好

岡本 道子

武村 利子

好

高橋 良風

杉山 壽子

道

壽

治

女房ナオの小言うるさし山眠る

おでん屋台に月見する人

酔っぱらひ愛しあの子の名をこぼし

屏風の蔭の恋の睦ごと

旦那面豊ふく寄附どつとくる

七百年の歴史たどりて

鉄橋ナウを渡る電車のがたとと

児と野遊に犬も引き連れ

花の冷えジョギングコース咲き揃ひ

ゆうらりゆうらり枝の風船

利

同

好

同

壹

道

治

壽

壹

執筆

平成三年六月二十六日 首尾

於 猿投台公民館

行く秋を

豊田 好敏 捌

行く秋を止めたきことの多かりし

名残の月もほのと雲間に

ゐのこづちあの児この児にとりつきて

湯につかりてはうなる義太夫

新築は檜造りの平屋建^ウ

隣の犬は色白の犬

りえちゃんのヌード写真で「朝日」売れ

ポーナスを手にな久米の仙人

寒鯉の濃味噌仕立て好き好きよ

泥んこ靴を母に洗はす

豊田 好敏

東 明 雅

山 口 美 恵

吉 田 憲 助

佐 古 英 子

鈴 木 茂

松 本 碧

雅

碧

茂

観^オ世音大慈大悲で立ち給ふ

不偶の人へノーベルの賞

短夜をゴンドラに乗り月を追ふ

香水かほる胸に口付け

地獄まで墮としてみせよう美い男

寒雁の声ひびく海山

夢^{ナウ}去りて酒に浸る日続きをり

芽吹き頃には頭痛再発

出勤の車窓にさっと花吹雪

籬はなれず姫蛇の飛ぶ

平成三年十月十七日 首尾

於 電通南寮

恵 助 英 助 助 恵 雅 茂 英 碧 茂

初紅葉

小海線車窓に望む初紅葉

夕月肩にまろき山々

霧こめし音楽堂は寂として

せせらぎ渡る人のさざめき

マッフィンとロシヤ紅茶は如何です

地球の裏に夜毎テレフォン

枝折戸を開けて迎へし許婚者

お辞儀三度に握手三回

サーフィンをするには波の高過ぎて

風見鶏かと見れば大瑠璃

中島 啓世 捌

井上 哲也

橋本 満喜

牧岡 歌子

藤井 弘美

藤田 克子

山本 八乃子

橋本 六三

也

喜

歌

二人^{ナオ}だけ島の教会式次第

成田に着いて右と左に

うさ晴しドミノにも負け苦き酒

餅を詰まらせ逆立ちをする

暖炉燃え山小屋の窓織き月

句座をたたんでバスへ直行

土産^{ナウ}買ふおばたりあんは群をなし

冴返る道登校の子等

満開の花に栗鼠まで声立てて

蜂の羽音のいともかるやか

平成三年十月十二日 首尾

於 八ヶ岳高原ロッジ

美 克 八 喜 也 三 美 克 八 歌 美 克 八

ぼうたんや

中村 ふみ 捌

ぼうたんや雨にほんのり色増せり

瓢虫のひそむ石垣

丹念に大鍋小鍋磨きゐて

とんとんとたとたく母の背

満^ウ月のかかる山の端旅の宿

霧の雫にゆれるパラソル

そぞろ寒「いっちゃいや」しかいへないの

西欧の秘画そつと拡げる

アイコンには赤子のイエス笑み給ふ

ワインきき酒巡る杯

式田 和子

中川 哲

中村 ふみ

安永 朋子

哲

朋

和

哲

和

朋

大寒オホセムイのきびしさ老いの独り棲み

荒鷲オウジュウむずと兎捕へる

コンサートクルド難民救ふ声

淡き金髪黒き腕に

愛囁オノエを月に団扇でひた隠し

四十すぎても直らない癖

同窓ナウ会名簿のワープロ打ち違ひ

案内風揚げ浜松の在

ごまあへの青菜にも降る花吹雪

遍路の笠の置かれたるまま

平成三年五月十三日 首尾
於 渋谷連句会

哲 和 和 朋 同 朋 和 朋 和 哲

望の潮

八角澄子捌

隅田川つなぐ鯉や望の潮

八角澄子

吹き過ぐ風に柳散る頃

瀧川雅代

爐納めの主客の声も和らぎて

下坂元子

相手構はずにじり寄る猫

梅田利子

ジョーウィンドウ値札のゼロを数へつつ

元

制服をぬぐ時を夢見て

利

親友といへどゆづれずこの恋は

同

鰭美しき魚も闘ふ

元

半眼に弥勒菩薩の影涼し

代

ロケのかつらの昼寝するバス

利

有^{ナオ}為^オ転変赤の広場に挙あげ

ぐつぐつ煮える豆と馬鈴薯

藁沓の月下を集ふ若衆宿

艶笑咄年増乗り出し

ブランデー琥珀透かせて投げキッス

餌かき散らす籠のカナリヤ

百^{ナウ}歳のふたご姉妹のよく笑ひ

麗の縁に手毬ころがす

パレードのチューバにかかる花吹雪

ついてゆく子についてくる蝶

平成三年十月二日 首尾

於 深川芭蕉記念館

元 利 代 澄 代 元 利 同 代 元

古 曆

曲がりぐせ忘れぐせつき古曆

師走の日ざし据る丸窓

小公園猫と幼児遊びゐて

耳にカセットリズム足先

ほろ酔^ウひの手が届きさう夏の月

武蔵野夫人藤椅子に掛け

別れるの別れないのと水の音

隅の祠に塵少し積む

アメリカとイラク綱引果てもなし

お好焼にソースたっぷり

原 田 千 町 捌

佐藤節子

小林しげと

真田光子

原田千町

高 二 彦

節

と

彦

光

と

嵩^{ナオ}ばって邪魔で要る時ない硬貨

脱衣婆けふのとみに急しき

寄り添ひて馬となりたる茄子胡瓜

云ってしまつて悔ゆる十六夜

職場では他人^{ひと}のふりするそぞろ寒

ポンポコリンのちびマルコちゃん

おんぼろのテレビ叩きて老眼鏡^{ナウ}

ふるさとを訪ふ蝶生るる頃

淡墨の花は昔の夢を咲く

学園祭の賑はへる春

平成二年十二月九日 首尾

於 光ヶ丘近隣センター

と 町 節 彦 光 彦 と 光 節 町

紅葉宿

小流れの音雨かとも紅葉宿

栗名月に濡るる吊橋

夜長人眠れぬままに立ち出でて

信号待ちの群がいっぱい

札幌^ウのシンボルと言ふ時計台

とろとろと燃ゆ白樺の櫓

咳すれば優しく肩を抱いてくれ

夫婦気どりの一日の旅

琵琶かかへ乙にすました弁財天

己が干支の猿探しをり

文音

東 郁子

寺岡 情雨

東 明雅

郁

雨

雅

郁

雨

雅

郁

幻^{ナオ}か夢か現か夜明前

帰国の孫は寝言英語で

マンションの3DKに三世代

夏ともなれば外で恋する

なめくぢのやうな彼なり迷ふ月

にやりと笑ふ奪衣婆の像

静^{ナウ}かなる山の町営美術館

野遊びの人盃を片手に

西行の如く死ぬべし花の下

終の栖の永き春日

平成三年十月十二日 首

同 十二月三十日 尾

雨 郁 雅 雨 郁 雅 雨 郁 雅 雨

京土産

京土産本に挟みし冬紅葉

小春たのしむ久闊の談

栄転の知らせ嬉しき挨拶に

扉より顔出す子供幼き

杉^ウの山とつぷり暮れて三日月

雲居の雁によせし玉章^{たまづさ}

肌寒の風ひとしほに人恋し

峡の村々旅芝居行く

開発はこゝにも及ぶ旧街道

巧く乗ったるバブル経済

膝送り

平野桜丘

田原竹無斎

尾向閑堂

藤井草舎

千木良果然

馬場彬風

齊

丘

舎

堂

サーフィンで七転八倒懲りもせず

海より昇る月は涼しく

軽々と老母を背負ひ寺詣で

戦争知らぬ世代交替

カラオケに浸りてあほる独り酒

心の痛み癒す術なき

夕^{ナウ}されば腹へりたらん俳画描く

子猫しきりに裾を引っぱる

吹き上げてまた下を逼ふ花嵐

霞の帯も絶ゆる大空

平成三年十一月十三日 首尾

於 興流会談話室

然 齊 風 丘 堂 舍 然 齊 風 堂 齊 風

今年酒

長雨の明けたる庭や今年酒

雲間に覗く上弦の月

美術展搬出を待つ像ありて

子等の持ち寄るプラモ電動

鳩小屋の中の若禰宜機嫌良し

絵馬に託せしころ愛しき

山好きを朴念仁と謗られる

虹のかかれる音止めの滝

外人の箸を巧みに心太

歌舞伎役者の踏みし六方

両吟

佛 洵 健 悟

木 場 田 文 夫

夫 悟

悟

夫

悟

夫

悟

夫

いざなぎを^{ナオ}超ゆる景気も果て見えて

ローレックスは腕に重たし

三高の一つが足りず嫁の来ず

降誕祭の月に男等

熊撃ちの銃たのもしき黒光り

貰ふ番茶に茶柱の立つ

草枕^{ナウ}漱石しのぶ峠の碑

左ハンドル停車ピタリと

ホコテンにスター夢見て花吹雪

洋品店に春燈揺る

平成三年十月十五日 首尾

於 二子稿「幸林」

同 悟 夫 悟 夫 悟 夫 悟 夫 悟 夫

金木犀

金木犀散り敷く坂や雨あがる

三日月の出る練堀の上

秋深むコーヒーミール回しゐて

コミック本に児等はひたむき

仮想敵時空のかなた発進す

天壤無窮熱きくちづけ

千恵子抄不意に涙の光る窓

蜜柑を卓に頬杖の昼

餅を搗く留学生の賑やかに

処狭しとバッグ置かれて

両吟

佛 浏 健 悟

近 藤 守 男

男 悟

悟

男

悟

男

悟

男

閣僚ナオの辞任挨拶始まり

お百度参り老母は欠かさず

逆縁婚又燃えさかる哀しさよ

泉に浸ける足をひらひら

白壁の町に来てゐる夏燕

走る自転車どれも新型

コンペ終へ次のホールに皆勇みナウ

酒酌み交ひて春月も揺れ

鐘撞けば風の鎮まる花の庭

縁に乾かす凧の大文字

平成三年十一月二十五日 首尾

於 近藤方

同 悟 男 悟 男 悟 男 悟 男 悟 男 悟 男

木々の風

木々の風さやかになりし夕べかな

ベンチの上に月見する猫

秋渇^ビザパイ厚く大皿に

時間ですよと母の呼ぶ声

新型車電子制御の極まりて^ウ

暗号託すかりそめの恋

まなざしで将校酔はすディートリヒ

霜夜の鶴の身じろぎもせず

病む吾子につきゐて白む縁の先

小皿にたまる吸ひさしの灰

両吟

佛 潤 健 悟

峯 田 政 志

悟

志

悟

志

悟

志

悟

志

秋葉原プレミアセガむ人訛り^{ナオ}

ビルの谷間にまつる氏神

やはき手を取れば月射す青簾

ほうたる飛ぶと言ふも愛らし

発掘の品に覇権の偲ばれて

水出し珈琲ぼとりぼとりと

浮き沈む競輪選手不惑なり^{ナウ}

眼鏡新調山笑ふ昼

AVの読経洩れくる花の門

バス待つ列に摘草の籠

平成三年九月十一日 首尾

於 新宿「滝沢」

同

悟

志

悟

志

悟

志

悟

志

悟

薔薇小径

薔薇小径謡曲の声溜々と

蜥蜴かくるる踏石の陰

蓋物に昆布嘗物詰め終へて

宅急便で子等に家苞

月蒼くモデルほほえむアトリエに

胸の谷間のクルスうそ寒

男ぶり良けれど足らぬ螻蛄の才

涙もろくて写真撮らるる

救援の梱包医薬こぼれ落ち

まづ雪はらふ宿の軒先

本田八重子 捌

対馬 洋子

本田 八重子

式田 和子

松田 多恵子

蒲原 志げ子

和

志

多

洋

和

猿^{ナオ}まはし振舞酒をつい過ごし

高速道路事故でのろのろ

老らくの恋に狂って午前様

団扇でかくす柔肌の月

ハナコ族束縛はノー遊ぶだけ

セキセイインコいつか野生化

三^{ナウ}の蔵紡ぎ車にふれてみん

船頭さばく鳴門観潮

遠山のゆるき起伏に花おぼろ

熱気球とぶ春の草原

平成三年五月十七日 首尾

於 おうめ様

多 八 志 同 洋 志 和 同 多 志

秋 社

町田 順風 捌

観能の秋社へ集ふ人の波

野外棧敷を照らす名月

どんぐりの目鼻可愛く描かれて

ピアノ連弾兄と妹

町田 順風
小野 シズ
若尾 よしえ
篠原 達子

ミャンマーのスーチー女史にノーベル賞

時節到来告ぐる電文

明けがたの地震にとび込む夫の床

猫はちらひて外へ出てゆく

夏場所を夢中で見てゐる寺の庫裡

笹いっばいの茹で枝豆

ズ 達 同 風 え ズ

漁船団赤道直下の洋上に

ポルノカセットボースンの部屋

やんはりととろけるやうな白い肌

古妻思ひ酔にまぎらす

氷る月市場はいまだ人気なく

消えては浮かぶU F O 編隊

したたかに生きてあつけら傘寿なり

朝な夕なに庭の鶯

ポトマック河畔の花の咲きみだれ

バントワラー春の行進

平成三年十月廿日 首尾

於 梅丘会館

え 達 え 風 え 達 え 達 え 達

あぢさゐの

松田多恵子 捌

あぢさゐのなほあでやかに雨の庭

細樋のかげ生る蟠螂

香手前文台に墨磨り終へて

練切りが好き羊羹も好き

連れ立ちてセゾン劇場待宵に

今年煙草の香のうつるキス

敬老日無料定期で通ふ女

地下の居酒屋呷る一杯

大統領二人かかへて赤い国

達者な熊の多いサーカス

松田多恵子

橘文子

式田和子

金久保淑子

文

和

淑

文

淑

多

よどみなく啖呵切りつゝ曆売^{ナオ}り

高校生のはやも中退

カルチャーは自疆術てふ教室も

情念あつて乱拍子打つ

身八つから浴衣ゆるめる織き月

エレベーターを早く押すひと

年^{ナウ}回忌昔語りに妻偲び

帰雁写せし入賞の作

昏れなづむ窓にうつすら花明り

子をとろ子とろ春も闌

平成三年六月廿一日 首尾

於 鎌倉おうめ様

和 淑 文 多 文 和 淑 文 淑 和

しぐれ哉

新葉の出初めて早きしぐれ哉

帰り支度のせかる冬の日

遊覧船舳先に声の弾むらん

箱弁当を配る当番

パソコンの調子たしかめ月の窓

オカリナ吹けば揺るるコスモス

秋袷今も焦がれるその瞳

魔風恋風ところ嫌はず

永田町総裁劇の浮き沈み

引越し荷物部屋に積み上げ

本屋 良子 捌

翁

本屋 良子

内田 麻子

市野沢 弘子

福井 隆秀

加藤 道子

麻子

秀

道

弘

ナオ
ヒール 飲むごろ寝の顔を猫が舐め

月の山脈郭公の声

教会に額づく少女はにかみて

宮沢りえは大胆に脱ぐ

旗立ててホモセクシャルに市民権

葉がらみの株が上るよ

ナウ
ふらふうぷ 流行りし頃の輪をみつけ

跳び出す蛙よけてポストへ

大門の飾灯籠花に顕つ

三三五五と子等の踏青

平成三年十月十六日 首尾

於 深川芭蕉記念館

秀 麻 弘 秀 道 麻 良 道 良 弘

枇杷咲くや

八木 聖子 捌

枇杷咲くや矢作川面の薄光

懐手の子口笛を吹き

三毛猫とカウチポテトで寝そべって

判読できぬファックスが来る

月^ッ天心研究室のあかり消え

茱萸はすっぱい恋はくるしい

コスモスのゆらぎで今し身ごもれる

市議選に出る女七人

街角の噂話は尾鰭つき

飛行船ゆく夕暮れの空

矢崎 藍

枝広 風美子

石黒 正子

八木 聖子

柿本 時代

藍

聖

藍

代

美

りん^{ナオ}りと背の彫は夜又夏の月

義理と金との蟻地獄なり

崖に立つ僧院の地下密かごと

コカイン打ちてふたり昂り

微笑みて出自あかさぬ美青年

時計かちかちまた雨となる

やれ掘れよ鉱泉でろよ祈るごと^{オウ}

地震に覚めたる春の夜の夢

つづいてのお知らせですよと花だより

小さな巣箱父と合作

平成二年十二月十八日 首尾
於 棒の手会館

正 藍 同 代 聖 正 代 正 代 美

歸り花

歸り花床に明るし奥座敷

障子に映る正客の影

潮騒の砂丘はるかに聞えきて

歩けばすぐに臭ひかぐ犬

天平^ウの丹塗の柱屋の月

盆狂言で見初めたるひと

からみつく男葡萄の蔓じゃなし

酒の上とてとんだ失礼

警察官教師議員の旅行会

高圧線の続くどこまで

山口 美恵 捌

佐古英子

野村洋子

青木秀樹

豊田好敏

松本 碧

東 明 雅

山口 美 恵

洋

樹

敏

雨蛙^{ナオ}ふと鳴きやみて畦静か

亡き母しのぶ母の日の月

ベネチアの雑踏の中振り返り

やっと思つたクレオパトラよ

後朝にのたうつ白蛇目に残る

お好み焼のあとはお茶漬

子供^{オウ}等は巨食拒食で医者通ひ

幸ねがひ雛の市寄る

遅桜求め求めて北の国

のどかに遊ぶ鳥も魚も

平成三年十一月二十一日 首尾

於 電通南寮

樹 恵 碧 英 雅 敏 英 洋 雅 碧

新樹

吾が町の坂八方の新樹かな

涼風を背に押す乳母車

調律師長調短調こもごもに

白き陶器の耳垂れし犬

「完^ッ」と書き眼鏡はづせば月まどか

林檎もらったことが発端

ファックスの恋文たまる秋渴き

海賊版のユーミンの歌

大物のはずが大麻で逮捕され

今吊したる鮫鰯の口

山口みづゑ 捌

山口 みづゑ

五味 蓉子

高瀬 美保

八角 澄子

上月 淳子

岩田 玲子

内田 麻子

玲

蓉

麻

有明^{ナオ}の底冷え競りの始りて

ダンボール箱ころりころがる

托鉢の僧みじろがず黄の衣

熱砂に見たる「奇想天外」

どうなっ^てこ^うな^つたのか異国妻

サムシングスペシャル唇よせて飲む

デジ^{ナウ}タルの体温計に馴れぬ祖父

池の澱みに蛙鳴きたつ

花吹雪童^{とん}童^{とん}ちゃんは女の子

ハンドル握り逃水を追ふ

平成三年五月二十三日 首尾

於 房連庵

澄 同 淳 保 麻 淳 蓉 忍 玲 保

ちちろ鳴く

ちちろ鳴く何処の蔭や杉木立

野分過ぎたる梢の夕月

秋場所のたつつけ袴行き交ひて

茶碗の酒をぐつと呑みほす

転勤^ウは人も羨むニユーヨーク

ハドソン川に抱き合ふ影

なまじひに嫁せず女のこの年に

氷いちごの匙のぺかぺか

村祭拍子そろはぬ笛太鼓

補填をしてよ僕のテストも

山崎 一恵 捌

山崎 一恵

下坂 元子

梅田 利子

瀧川 雅代

雅

元

利

元

雅

同

総裁選派閥の本音探りあひ

覗かれてゐる青髯の城

絨緞の華紋の上に身をこがし

枕屏風にこもる沈香

寒の月隈なく照らす塩の道

小銭を供へ拝む石仏

三国志^{オウ}テレビ仕込みのおてがるさ

からりと揚る皿の公魚

老いてこそ夫唱婦随の花の旅

絵筆にうつす霞む山脈

平成三年九月十八日 首尾

於 山崎宅

利 元 利 惠 雅 利 同 利 雅

野分だつ

野分だつ葛飾の道まっすぐに

月見にはまだ間ある芋畑

柚味噌練る母の手太く節くれて

払ひのけてもじゃれてくる猫

ケンゾー^ウのパンツスーツの多彩なる

ボタンのはづれ掛けさせる仲

二人乗り自転車女の御するまま

森の奥より洩るる讃美歌

「蝮酒あります」の文字右さがり

政変よそこに動く黒幕

若尾よしえ 捌

秋元 正江

東 郁子

久保田 庸子

若尾 よしえ

江

庸

郁

同

江

庸

ものけの憑きたるといひ抗鬱^{ナオ}剂

火山焼てふかろき煎餅

情熱のイタリア人になだされし

男爵夫人やめてO・L

大漁の鮪上げたる月の浜

独楽教へればやめぬ子供等

鋸^{ノウ}の目立を業に半世紀

夢のつづきを春の炬燵で

お中堂扉の隙の花明り

をりをり響く鶯の声

平成三年九月八日 首尾

於 光ヶ丘近隣センター

江 郁 庸 江 郁 江 庸 江 庸 江 郁

籠 鳥雲に

両 吟

鳥雲に入る如し子は嫁ぎたる

目に泌むばかり白き木蓮

臨書して清明の頃過ごすらん

BGMはクラビアの曲

噴煙のとぎれとぎれに月を見て

待ち兼ねてゐる獺の解禁

悠然と穴惑^ウひとも申されず

エデンの園はすでに荒廃

経済は一流政治は二流国

三角四角ややこしい仲

花咲いて散っていつしか遠き恋

太公望の笠に柔東風

片山多迦夫

原田千町

迦

町

迦

町

迦

町

迦

町

迦

町

壬^{ナオ}生念佛どつと笑ひの沸きおこり

拾ひし籤が当りくじとは

珈琲に数滴垂らすブランデー

年惜しむかに机辺浄むる

月冴え冴え妖かしの棲む天守閣

義理人情は捨てし道行

倅^{ナウ}せのめくるめくごと夏深む

ペレストロイカ累卵の上

デジタルの時々刻々に世は動き

暮れかけてゐるお地蔵の顔

まどろみへ花のかざしの乳母車

千歳の舞翁うららか

平成三年五月二十日 起首

平成三年八月十五日 満尾

迦 町 迦 町 迦 町 迦 町 迦 町 迦 同

あとがき

連句猫蓑作品集Ⅱをお届けいたします。

この作品集は、平成二年十一月から平成三年十一月までの作品を、歌仙、二十韻夫々捌一人一編を基準に参加して頂いたものです。

膝送り・両吟・文音等も加わったバラエティーに富んだ作品、昨年を上回る参加数に、原稿処理も楽しく進めることができましたが、昨年に引続き「猫蓑作品集」が出版されますことは、主宰明雅先生のご指導の並々ならぬものに加え、連衆の弛まざる努力の所産、風雅の誠を追求して止まない心こそが、連句という文芸を守り育てて行くことであろうと思いつつ、心熟くしたものです。

昨年と同様に、印刷を岩田印刷所にお願ひし、校正を八の会が担当いたしました。二月二十八日の第一回校正には梅田利子・下坂元子・瀧川雅代・山崎一恵・若尾よしえ・賛助者の秋元正江の諸氏がお手伝い下さいましたこと、有難くお礼申し上げます。

庭の白梅は真盛りの好日、校正後の闇汁の設定などの楽しさなどもあり、皆作品集を産み出す

喜びの中に過ごし得たことは嬉しく、これからも皆様と共に、作品集の上梓の喜びを頒ち合いたいものと願いつつ、二十一時参会いたしました。

平成四年三月吉日

下 鉢 清 子

猫蓑作品集 II

平成四年三月吉日

発行人 東 明 雅

発行所 猫 蓑 会

定価 一、七〇〇円（送料実費）

印刷所 株式会社 岩田印刷



